

Keio

Research

Center

for

the

Liberal

Arts

慶應義塾大学
教養研究センター

**2020 年度
活動報告書**

2020年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

は じ め に

慶應義塾大学教養研究センター所長 小菅隼人

2020年度の活動報告書をお届けします。

2020年度は文字通り「新型コロナウイルス感染症流行1年目」として記憶される年になりました。日本では2020年2月にはじまった流行によって、慶應義塾大学も2019年度の卒業式が中止、2020年度の入学式が延期となり、新学期の授業は4月30日から原則としてオンラインで行われることになりました。4月7日には、ついに「改正新型インフルエンザ等対策特別措置法」に基づく緊急事態宣言が、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県、および福岡県に発令され、4月16日には全国に拡大されました。大学のみならず、劇場、博物館、映画館など教養研究・教養教育に深く関係する施設も閉鎖を余儀なくされました。2020年度中、この流行は一時的な終息を見せたかと思いきや再燃して、第2波、第3波と続き、2021年5月のゴールデンウィークもまた流行の波の中にあります。緊急事態宣言も発出され、慶應義塾の研究教育はいまだ大きな影響を受けています。

しかしながら、私は、最近、新型コロナウイルス感染症の流行は、少なくとも（罹患せずにすんでいる）現在までの自分にとって、果たして不幸なことだけだったのかと思うことがよくあります。この感染症がなかったら、ZoomやWebexなどというものは全く知らずに定年まで過ごしてしまったでしょうし、授業の動画を製作するというものもなかったでしょう。また、国内学会においても、国際学会（時差の不便はありますが）においても、Zoomで簡単に会議ができるようになったことで、時にはブレイクアウトルームなどを使い、かえって委員の間の交流は深まったように思います。その点では、自分にとって悪いことばかりではありませんでした。何より、自宅から簡単に職場にアクセスできることで時間的余裕ができ、自分の研究、教育、生活、将来を見つめ直す機会になりました。それは学生も同じでありましょう。不幸な面から逃げることなく、それでも、幸運だった面も見据えてこの危機を乗り切りたいと思います。それにしても、この新型コロナウイルス感染症はいつ終息するのでしょうか？終息後の世界は果たしてどう変わっているのでしょうか？その時のためにも、今の時間をしっかりと教養研究のために、そして、対面授業が全面再開された時の教養教育の準備のために使いたいと思っています。

教養研究センターの全ての活動はこの報告書に示されています。この厳しい状況にあっても、極東証券株式会社様、株式会社白寿生科学研究所様、株式会社コーエーテクモホールディングス様、また、(2020年度は学生を引率しての庄内セミナーは実施できませんでしたが)映像収録などにおいて鶴岡市、致道博物館など大学外部からの様々なご支援を受けて、教養研究センターは、縮小しながらも研究教育活動が展開できました。20年続いた極東証券株式会社様からの寄附講座は、2020年度が最後の年となりました。長い期間の多額のご寄付に心より感謝しています。この大きな状況の変化に伴い、新しい教育プログラムを早急に考えることが私たちには求められています。そのご期待に背くことがないように、我々所員・教職員で精一杯努力する所存ですので、何卒今後ともご指導とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

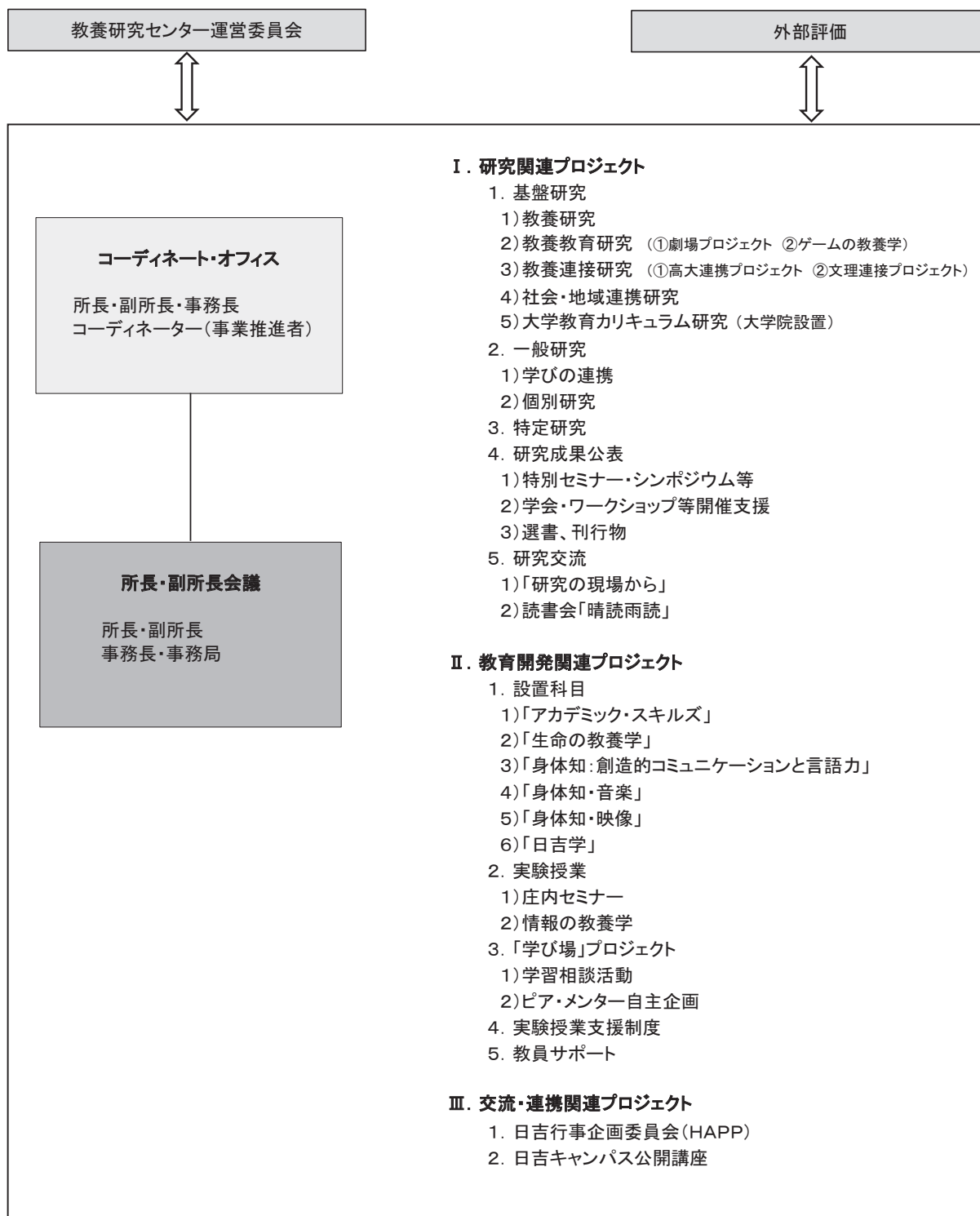
目 次

はじめに	3
組織構成と事業計画	5
2020年度事業報告	6
広報・発信	8
I 研究関連プロジェクト	
基盤研究・一般研究・特定研究	10
研究成果公表	
学会・ワークショップ等開催支援	13
〈選書刊行記念企画〉 著者と読む教養研究センター選書	14
研究交流	
研究の現場から	15
II 教育開発関連プロジェクト	
1 設置科目	16
1-1 アカデミック・スキルズ	17
1-2 生命の教養学	18
1-3 身体知—創造的コミュニケーションと言語力	19
1-4 身体知・映像	20
1-5 身体知・音楽	22
1-6 日吉学	23
2 実験授業	
2-1 庄内セミナー	24
2-2 情報の教養学	25
3 「学び場」プロジェクト	26
III 交流・連携関連プロジェクト	
1 日吉行事企画委員会 (HAPP)	27
2 日吉キャンパス公開講座	29
3 「創造力とコミュニティ」研究会	30
資料編	
1 慶應義塾大学教養研究センター規程	32
2 運営委員会委員	34
3 組織構成員	35
4 2020年度の主な活動記録	36

※本報告書では、各プロジェクトを便宜上3つのカテゴリーのいずれかに分類しました。

※所属・職位は授業、イベント等開催当時のものです。

教養研究センター組織構成と事業計画(2020年度)



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

2020年度 事業報告

詳しい報告は各項目に譲るとして、ここでは、当初計画による形式上の分類に捉われず、内容から全体を概観して、研究活動、設置科目、啓蒙・サポート活動、地域連携活動として概要を述べる。

1 研究活動について

A) 2020年度も前年度同様「大学教育カリキュラム研究」については特段の研究活動はない。しかし、日吉のカリキュラム作成において大きな改革ポイントとなった日吉カリキュラム検討委員会の設置は、教養研究センターの基盤研究の一つの成果であった。今後も大学における教養とカリキュラムの関係の重要性に鑑みて、教養研究センターの事業として設置する予定である。2020年春より始まったコロナ禍において、オンライン教育が大幅に導入されて、授業の形態そのものに革新的な変化がおきつつある。オンラインライブ、オンデマンド、課題方式など様々な形式が混在するなか、授業内容とあわせて理想的な形を追求することが必要となろう。そのための枠組みとして維持するつもりである。

B) 基盤研究「教養研究」の講演会とシンポジウムは、コロナ禍による学内施設の閉鎖、対面授業の停止などの影響により実施することができなかった。

C) 「教養教育研究」では、コーエーテクモホールディングス寄附講座「ゲームの教養学」の実験授業を計画し、春学期に実施予定であったが、コロナ禍の影響により翌年度に見送ることとなった。今後、2022年度の開講を目指している。

D) 「高大連携プロジェクト（教養の一貫教育）」において、教養を軸とした高校と大学の連携が前年度に始動し、慶應義塾高校の合意を得て、日吉協育ホールにおいて講演会が行われる予定であったが、コロナ禍のため叶わず中止となった。

E) 「文理接続プロジェクト」は、鈴木晃仁教授、荒金直人副所長、見上公一専任講師を中心に基本的プランを練り、非常に充実した内容をもった6回の研究会が行われた。対面での直接討論は叶わなかったが、Zoomを使ってのオンライン上での議論は、コンスタントに10名程度の参加者を得て定着しつつある。特に自然科学研

究教育センターの井奥洪二所長の参加を得て、塾内連携の体制が整いつつあり、このプロジェクトの発展が見込まれる。ブログでの広報に加えて、今後、成果発信の充実が望まれるところである。

F) 「社会・地域連携研究」については、横山千晶教授によるコミュニティ研究が主たる成果である。コロナ危機によって分断された社会において新しいコミュニティの研究は、喫緊の課題である。この研究はコロナ禍にあっても果敢に今後のさらなる展開が望まれる。

2 設置科目について

A) 「アカデミック・スキルズ」：教養研究センターの教育活動の中で、最も大きな位置を占める「アカデミック・スキルズ」は、コロナ禍のため、秋学期のみオンラインで開講された。また、学生主体の「プレゼンテーション・コンペティション」と「論文コンペティション」も、オンラインで実施された。2020年度をもって極東証券寄附講座は終了となることが決まったが、今後、新たな寄付元の開拓と特別な予算的措置を行い、一部でも復活させたいと考えている。なお、前年よりリニューアルを進めた「アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ」は2020年に15本に達し、全国から問い合わせもあり好評を博している。

B) 「生命の教養学」：コロナ禍のため、休講となった。

C) 「身体知」：長い検討を重ね、横山千晶教授の努力により、中止とはせずにオンラインによる集中型の開講となった。

D) 「身体知・映像」：春学期は、コロナ禍により休講となった。しかし秋学期は開講し、2つのグループに分かれて集中して映像制作を行い、上映会を行うことができた。

E) 「身体知・音楽」：株式会社白寿生科学研究所寄附講座「身体知・音楽 I、II」は、教養教育の一環として音楽芸術の良き理解者を未来社会に派遣するということを目指している。音楽大学以外で、実践をも含めたこれ程充実した音楽教育を行っている大学は他に無いのではないかと自負している。音楽を通して教養教育のさらなる展開が期待される。2020年度においては、コロナ禍によって、飛沫感染が特に心配さ

れた「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」(声楽クラス)は春学期休講となったが、秋学期は感染症対策に万全の注意を払い、対面授業を行った。「古楽器を通じた歴史的音楽実践」(器楽クラス)は、春学期はオンラインでレッスンを行ったが、秋学期は声楽クラスと同様の対策を講じ、対面授業を行った。石井明教授による教養教育への確固たる信念のもと、両クラスとも入場制限を行ったうえで発表会を開催し、YouTubeを介したライブ配信を行った。

F)「日吉学」:株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座「日吉学」は、不破有理教授のコーディネートによってオンラインで開講された。

3 啓蒙・サポート活動について

A)「日吉キャンパス公開講座」:長時間議論を積み重ねたが、受講者の年齢の高さ、コロナ禍終息が見通せないことから、中止となった。

B)「情報の教養学」:主に学生を対象として、教職員・一般にも開いた講座である。コロナ禍によって、対面講座ができないため、かねてより好評であった福井健策氏に依頼し、著作権についてのオンデマンド映像(「オンライン社会を生き抜く著作権」30分×3本)を作成した。福井氏の巧みな話術と専門家としての見識により非常に評判がよく、続編の制作も望まれている。

C)「学習相談」:コロナ禍によって大きな影響を受け、2020年度は秋学期11月～12月の2ヶ月間、時間を短縮しての活動となったが、通常での対面での相談に加え、オンラインでの相談も受け付けた。

D)「研究の現場から」:オンライン形式で実施された。コロナ禍による分断によってさらに人の繋がりが求められる中、貴重な機会となった。オンラインによってかえって参加しやすくなった面はあり、今後、対面とオンラインの併用も視野に入れることができる。

E)「学会・ワークショップ等開催支援」:コロナ禍によって、各学会の対面開催が中止になったことを受けて、日吉キャンパスでの開催に拘らず、オンラインでの実施も支援対象として2件の応募に支援をした。

F)「読書会」:2020年度は、コロナ禍のため、残念ながら実施することができなかった。しかし、今後、オンラインなどにより実施が期待される。

4 地域連携活動について

A)「庄内セミナー」:コロナ禍によって実施できなかったが、鈴木亮子実行委員長、小菅隼人所長、大古殿事務長の三人で鶴岡市を訪問し、酒井忠久氏、東山昭子氏、大和匡輔氏にロングインタビューをおこなった。映像制作については鶴岡市のスタジオに依頼した。コロナ禍の訪問に最大限の注意を払い、鶴岡市の理解も得て、事業を実施できたことは大きな成果であったと考える。このインタビューは教養研究センターのウェブサイトで閲覧することができる。

B)日吉行事企画委員会(HAPP):2020年度、前年の形式を引き継ぎ、新たな内容で展開された。コロナ禍の中、中止の行事もあったが、舞踏公演、音楽関係のイベントなどがオンラインなど形式を工夫して実施された。特に2020年10月28日、イベントテラスにて無観客によって収録された「笠井叡舞踏公演:日本国憲法を踊る」は、YouTube上ですでに2000回以上の視聴を得ている。別途インタビュー映像も公開され、これも1200回の視聴がある。1990年代にはじまった入学歓迎行事は、日吉の各教員、職員、学生を繋ぎ、学部教育からこぼれ落ちた知を結びつける活動の受け皿として、その後、日吉行事企画委員会となり、今日の教養研究センターの一つのルーツとなった。具体的には、春学期は主に新入生歓迎行事、秋学期は公募企画行事を行っている。

(小菅隼人)

教養研究センターでは、様々な活動の広報に努め、センターの意義を常に発信している。講演会や公開講座などはポスター、チラシによって告知するとともに、ウェブページを活用して最新情報を随時発信し、研究・教育活動の周知を行っている。

また、活動成果を公開する書籍などの出版にも力を入れているが、2020年度はコロナ禍による活動縮小により、刊行物は従前より減少した。

1. 極東証券寄附講座

【生命の教養学】

■西尾宇広編『生命の教養学 16 生命の経済』
2020年6月5日刊行

オムニバス講義「生命の教養学」は、講座の内容を書籍にまとめて出版している。本年度は2019年度の講座について、11本の論考を掲載した。総頁数245ページ。

【アカデミック・スキルズ】

■『2020年度「アカデミック・スキルズ」学生論文集』
2021年3月31日刊行

センターの看板科目である少人数制授業「アカデミック・スキルズ」では、一年かけて学生が論文を完成させる。これを学生自身が編集し、論文集として2004年度より毎年刊行している。本年度は諸学部1、2年生の論文46本を、講評とともに掲載した。

■アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ

「アカデミック・スキルズ」のエッセンスを誰でも手軽に学べるよう、15本の動画を制作し、ウェブ

サイトで公開した。

URL : <https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/culture/academic.php#movies>

2. 教養研究センター選書

■横山千晶『教養研究センター選書 21 コミュニティと芸術——パンデミック時代に考える創造力』
2021年3月31日刊行

センターでは、研究の前線を一般にもわかりやすい形で紹介することを趣旨として、選書を刊行している。原稿は毎年所員から募集し、査読選考を経て刊行を決定している。2020年度は1作が刊行された。

3. 報告書

■『教養研究センター 2019年度活動報告書』
2020年8月31日刊行

4. Newsletter (ニューズレター)

■第36号 2020年5月15日刊行

■第37号 2020年11月30日刊行

日吉所属教職員とセンター所員を対象とした広報の一環として、Newsletterを年2回刊行し、半年間の活動についてレポートを行い、今後の予定について告知する。巻頭言などのコラムもある。第36号では、小菅隼人所長名で「新型コロナウイルス感染症流行にあたっての教養研究センターの姿勢について」が掲載された。第37号では、中止を余儀なくされた諸企画担当教員による現状についての所感も掲載された。
(高橋宣也)

アカデミック・スキルズ 10分講義ビデオ テーマ一覧

研究とは何か?	小菅隼人 (理工学部教授)
文献を読む	片山杜秀 (法学部教授)
翻訳について	高橋宣也 (文学部教授)
レポートの問いの立て方	鈴木亮子 (経済学部教授)
剽窃 (ひょうせつ) について	池田真弓 (理工学部准教授)
効率的に情報を探すには	竹田咲子 (日吉メディアセンター)
読書術	坂本光 (文学部教授)
君も哲学してみないか — 哲学的思考法 —	斎藤慶典 (文学部教授)
調査的面接法の基礎 — 質的手法への誘い —	高山緑 (理工学部教授)
Persuasive English Presentations : Three Is the Magic Number	アダム・コミサロフ (文学部教授)
言葉は身体表現 — 英語という言葉をつまみかき —	横山千晶 (法学部教授)
ドイツ語を知り、日本語を知る — 大学生の語学 —	杉山有紀子 (理工学部専任講師)
教養の語学 — フランス語 —	原大地 (商学部教授)
中国語 — 発音の攻略 —	高橋幸吉 (商学部准教授)
図書館資料と著作権	今井星香 (日吉メディアセンター)

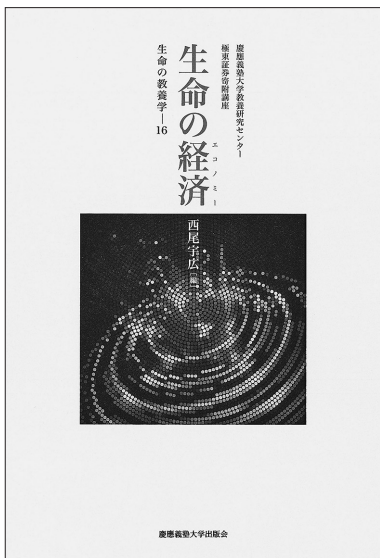


片山杜秀



坂本光

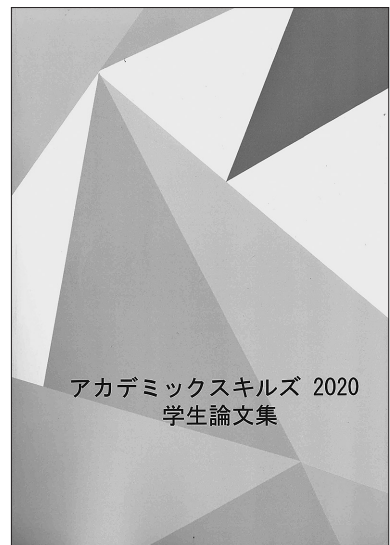
2020年度教養研究センター
刊行物一覽



極東証券寄附講座
生命の教養学 16 生命の経済
(2020.6.5 刊行)



教養研究センター選書
(2021.3.31 刊行)



2020年度
アカデミック・スキルズ学生論文集
(2021.3.31 刊行)



2019年度活動報告書
(2020.8.31 刊行)



Newsletter36号
(2020.5.15 刊行)



Newsletter37号
(2020.11.30 刊行)

基盤研究・一般研究・ 特定研究

■基盤研究

1. 「基盤研究」として、現在、構想されているプロジェクトには次の5つがある。すなわち、(1)教養研究、(2)教養教育研究 (①劇場プロジェクト、②ゲームの教養学)、(3)教養連携研究 (①高大連携プロジェクト(教養の一貫教育)、②文理連携プロジェクト)、(4)社会・地域連携研究、(5)大学教育カリキュラム研究(大学院設置)である。(1)~(3)はいずれも、コロナ禍によって大きな影響を受けた。(4)、(5)とともに以下に略述する。
2. 「教養研究」については、講演会を予定していたが、2021年度以降への延期を余儀なくされた。
3. 「劇場プロジェクト」については特段の活動は行われなかった。
4. 「ゲームの教養学」について新島進教授を中心に計画が実施されつつあるが、コロナ禍のため大きな影響を受けた。
5. 「高大連携プロジェクト(教養の一貫教育)」については、当初、慶應義塾高等学校とのプロジェクトが立案されていたが、コロナ禍のため中止となった。
6. 「文理連携プロジェクト」については対面式の研究会は実施できなかったが、オンラインで6回開催された。
7. 「社会・地域連携研究」については、株式会社コーエーテクモホールディングスの寄付により「日吉学」が設置科目化されており、2020年度はコロナ禍にも拘わらず、不破有理教授をはじめと

する関係者の努力によって、履修者が集まり、オンラインによって有効に展開された。また、横山千晶教授によるコミュニティ研究会などの取り組みが進んでいる。

8. 「大学教育カリキュラム研究」については、特段の活動は行われなかったが、今後、コロナ禍において、私たちが否応なく行うことになったオンライン授業の有効導入、日吉に置ける大学院設置など新しい課題について、議論が高まることが予想された年度であった。

■一般研究

例年通り、申請のあった研究活動に対して、研究オフィス運営協議会の承認を経て、来往舎2階のプロジェクト研究室(204室、205室)とプロジェクト研究員室(202室)を、研究オフィスとして提供した。これまで、一般研究については、所員の申請をほぼ自動的に認められていたが、まず、研究プロジェクトをコーディネート・オフィスの承認のもとにしっかりと位置付けるべきという考え方に立って、全ての一般研究についてコーディネート・オフィスで審議され、その承認をもって、研究オフィスの提供をおこなった。

■特定研究

2020年度、この項目について特段の活動は行われなかった。

(小菅隼人)

2020年度・プロジェクト研究員室(202室)利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ	利用者氏名・所属
鈴木晃仁・経済学部教授	精神医療の資料整理及び目録作成	清水ふさ子 (社会学研究科研究員)
鈴木晃仁・経済学部教授	日本におけるトラウマとモダニティ:戦争と労働災害をめぐる経験・解釈・補償制度	中村江里 (社会学研究科訪問研究員)
鈴木晃仁・経済学部教授	日本の栄養学の研究	SUN JING (ソン セー) (社会学研究科准訪問研究員)

2020年度・プロジェクト研究室(204室・205室)利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ
小原京子・理工学部教授	意味フレームに基づく言語資源の改良と他の言語資源とのリンク
津田眞弓・経済学部教授	日本学教育の国際化に関する研究
森吉直子・商学部教授	① Corporate Visual Identity に対する消費者反応に関する国際比較研究 ② 消費者の購入意思決定プロセスに関する国際比較研究
阿久澤武史・慶應義塾高等学校教諭	地域と連携した日吉地区の戦争遺跡の研究と教育的活用

基盤研究「教養連接研究」

文理連接プロジェクト「医学史と生命科学論」

<総括と展望>

このプロジェクトは2019年度に開始し、その年度は、医学史家の鈴木晃仁（経済学部）を中心に、教養研究センター所長の小菅隼人（理工学部）、副所長の一人である荒金直人（理工学部）の3名が企画に携わって、計6回の講演会を行った。2020年度は、科学技術社会論の研究者である見上公一（理工学部）を加えた4名で、初年度の反省点を踏まえつつ、新たな方向性を定めた。

①プロジェクトとしての連続性・発展性を重視し、定期的に参加することのできる文理にまたがる少人数の研究者メンバーを募って、そのメンバーを中心に月1回の研究会を行うこと。②「文理連接」の可能性をより具体的な形で模索し、実行するために、1年間の統一テーマを設定すること。2020年度の統一テーマは「感染」とする。新型コロナウイルス感染症に係わる切迫した問題を背景ならびに出発点としながらも、同時により文系的（社会学的・文学的・哲学的・人類学的など）な考察への展開が期待されるテーマが選ばれた。③研究会では、毎回1名が「話題提供」としてテーマに関連する内容を発表し、それを出発点に、なるべく参加者全員に発言の機会が与えられるような活発な議論の場を作ること。「文理連接」の可能性自体を模索する必要があるため、予め枠組みが設定された講演会や研究発表会ではなく、議論そのものを通じて新たな形が生まれ出されることが期待された。④研究会の構成メンバーが徐々に固まってきた段階で、研究会の運営方法自体を構成メンバー自身の議論によって決めて行くような、なるべく自律した構造を与えること。⑤「文理連接プロジェクト」のブログを作り、研究会活動の内容を記録すること。

こうして企画された2020年度の「文理連接」研究会は、その第一回を、感染症の専門家である大西和夫（国立感染症研究所免疫部客員研究員）による導入的な発表から始めることにした。当初は4月下旬または5月上旬の開催を予定していたが、2020年4月7日に新型コロナウイルス感染症の流行に伴う緊急事態宣言が初めて発令され、日吉キャンパスが閉鎖されたため、延期となった。その後、状況を見ながら何度も開催を延期し、最終的に10月9日にオンラインで第一回研究会が行われた（参

加者11名）。その後は、11月6日（5名）、12月11日（6名）、2021年1月8日（7名）、2月5日（10名）、3月19日（12名）と、半年で計6回の研究会が行われた。定期的に参加してくれるコア・メンバーが徐々に形成されたことが、大きな成果の一つである。2020年度の最終回（3月19日）では、2021年度の方針についても議論がなされた。

以下が2021年度の方針である。①研究会の基本的な形式は2020年度を踏襲する。②統一テーマは引き続き「感染」とする。但し、「文理連接」という目的に資するテーマであれば、直接的に「感染」に関係しないものも認めることにする。③鈴木晃仁先生のご退職に伴い、「医学史と生命科学論」という看板を維持することが困難になったので、これを削除し、「文理連接」と「感染」の二点を本プロジェクトの当面の指導概念とする。④活発な議論が可能である小規模な研究会の形を維持しつつも、参加を希望する教員または研究者をより広く受け入れるために、(1)「文理連接プロジェクト」のブログに問い合わせ先を示し、(2)研究会の開催をその都度、教養研究センター所員にメーリングリストから告知することにする。⑤ブログには、研究会の活動内容の記録に加えて、話題提供者の発表内容のレジュメなどの資料も掲載し、研究会の成果を蓄積することで、プロジェクトの質を高める努力をする。⑥2021年度は、上述の小菅、荒金、見上に加えて、井奥洪二（経済学部、自然科学研究教育センター所長）と寺沢和洋（医学部、教養研究センター副所長）にも企画メンバーになって頂く。

「文系的な知見や問題関心と理系的な知見や問題関心を、融合するのではなく接続させる」という本プロジェクトの理念を、どこまで具体的な形で実現することができるのか。このことは、まずは、研究会の参加メンバー自身にとってこの研究会がどれだけ有意義なものでありうるのか、ということに懸かっている。現時点までは、良いスタートが切れたと言える。企画者の一人として、これを大切に育てて行きたいと考えている。

（荒金直人）

<活動報告>

2020年度の文理連接プロジェクトは、2019年度末からの新型コロナウイルス感染症の流行を受けて、「感染」をそのテーマとした。活動開始時期も遅らせざるを得なかったが、2020年10月9日に大西和夫先生（国立感染症研究所免疫部客員研究員）をゲスト講師に迎えて開催された第1回を皮切りとして、計6回の研究会をオンラインで開催した。

大西先生からは、具体的な事例を踏まえながら、感染症を引き起こすウイルスの構造や種類、そして感染と免疫という人との関わりの結果として生じる生命現象についての説明がなされた。新型コロナウイルス感染症の流行以前から、現代社会は感染症と向き合ってきたにも関わらず、その理解が断片的であることに気付く重要な契機となった。

続く11月6日に開催された第2回では、鈴木晃仁先生（経済学部教授）が「COVID-19のパンデミックと食肉の問題」と題して、食肉の生産という労働行為の歴史的な位置付けと、感染症の始まりとしての人と動物の接点に関する話題提供を行い、局所化するそのような接点をどのように管理すべきなのかなどについて闊達な議論が行われた。

12月11日開催の第3回は、見上（理工学部専任講師）が「感染のリスクと科学技術」をテーマに、新型コロナウイルス感染症の対応の中に科学技術がどのように位置付けられているのかについて、批判的な視点からその問題を提起した。特にワクチンの開発は、その前例のないスピードが注目を浴びているが、その効果について過度の期待が寄せられていることに対する懸念も示された。

年が変わって1月8日開催の第4回では、フランスの人類学者フレデリック・ケックが鳥インフルエンザの経験を踏まえて自然と人間の関わりを考察した『流感世界』を、その翻訳者である小林徹先生（龍谷大学文学部准教授）が解説した。社会が未来に備えることは想像力を必要とする行為であり、その想像力は社会の状況によって規定される。そうだ

とすれば、私たちはこれまで何に対して備えてきたのか、また今回の経験がそのあり方にどのような変化をもたらすのかは、今後の重要な論点の一つと考えられる。

2月5日開催の第5回は再度科学的な視点に戻り、井奥洪二先生（経済学部教授・自然科学研究教育センター所長）が、新型コロナウイルス感染症が社会の課題として認識されるようになってからの一年という期間に出てきた様々な情報について検証を行った。感染症の対応など世界規模の課題について考える上で科学は不可欠である一方、科学の客観性と市民や患者の当事者性をどのように繋ぎ、社会の対応に結びつけることができるのかという問題が提起された。

今年度最終回となった3月19日開催の第6回は小菅隼人先生（理工学部教授）のファシリテーションの下で、これまでの研究会の議論を振り返りながら、一年間の総括と今後の展開についての検討を行った。冒頭では、新型コロナウイルス感染症は演劇の世界に確実に影響を与えているが、結果としてこれまでの活動の見直しや新しい可能性の模索にも繋がっていることが紹介された。では学問の世界ではどうか、そしてこの文理連接プロジェクトがどのような意義を持ちうるのか、というのが突きつけられた問いである。

文理連接という考えは、学問の「文」と「理」という形式的分類に依存している。しかし、感染はそのような分類に縛られない現象であり、研究会の議論を通じて、その理解が特定の専門性に縛られるものではないことが改めて確認できた。研究会の参加者は多岐にわたる議論を通じて多くの気付きを得ることができたが、そのような気付きがより広く学問の世界にも伝わるように、今後の活動のあり方を考えていくことが重要だと思われる。

（見上公一）

I 研究関連プロジェクト

研究成果公表
学会・ワークショップ等
開催支援

教養研究センターでは、所員が研究会・ワークショップ等を企画する場合、支援、奨励を行うことで所員の研究・教育の活性化を図っている。

所員による創造的な企画や意欲的な挑戦を奨励し促進することを趣旨としており、2020年度は春学

期3件が採択されたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、2件は秋学期に延期してオンラインで開催された。1件は中止となった。

(小菅隼人)

2020年度 学会・ワークショップ等開催支援一覧

申請者	会合名	開催日	開催方式	参加人数
熊野谷葉子 (法学部)	オンライン連続講演&討論会「日露の美術工芸交流とマトリョーシカ」	第1回 2020年8月22日	オンライン	塾内10名 塾外43名
		第2回 2020年9月22日	オンライン	塾内8名 塾外30名
		第3回 2020年11月21日	オンライン	塾内15名 塾外45名
		第4回 2020年12月26日	オンライン	塾内12名 塾外62名
佐藤元状 (法学部)	シンポジウム「プルーストと世界文学」-自分だけのズーム、テイク1	2020年11月14日	オンライン	塾内5名 塾外10名
辺見葉子 (文学部)	Japan Tolkien Symposium (Nippon Moot)	中止	—	—

オンライン連続講演&討論会
日露の美術工芸交流とマトリョーシカ
第1回
Zoom開催
マトリョーシカ
日本起源説をめぐって
熊野谷葉子 慶應義塾大学
2020年
8月22日(土)
午後 2:00 - 4:00
無料・どなたでも
kumanoya@keio.jp
へご連絡ください
折り返しミーティング情報をお知らせします
主催: マトリョーシカと日露美術工芸研究会
後援: 慶應義塾大学教養研究センター

オンライン連続講演&討論会
日露の美術工芸交流とマトリョーシカ
第2回
Zoom開催
ロシアの工芸とジャポニズム
ミハイル・ヴルーベリを中心に
上野 理恵
慶應義塾大学
2020年 9月22日
(火・祝)
午後 2:00 - 4:00
無料・どなたでも
kumanoya@keio.jp
へご連絡ください
折り返しミーティング情報をお知らせします
主催: 日露美術工芸とマトリョーシカ研究会
後援: 慶應義塾大学教養研究センター

オンライン連続講演&討論会
日露の美術工芸交流とマトリョーシカ 第3回
Zoom開催
山本鼎の農民美術とロシア
小笠原正 (上田市立美術館学芸員) 14:00-15:00
日本で芽吹いた農民美術の種
中村喜和 (一橋大学 名誉教授) 15:00-16:00
山本鼎とロシア
2020年 11月21日(土)
午後 2:00 より
参加無料
申込はメールで
kumanoya@keio.jp
主催: 日露美術工芸とマトリョーシカ研究会 後援: 慶應義塾大学教養研究センター

オンライン連続講演&討論会
日露の美術工芸交流とマトリョーシカ
第4回 Zoom開催
有信優子氏
『ロシアのマトリョーシカ』著者
スヴェトラナ・ゴロジャーニナ
ロシア国立セルゲフ・ボサド文化財保護博物館
XVIII-XX世紀ロシア民衆美術工芸部部長
マトリョーシカの謎と七福神
2020年 12月26日(土) 午後 4:00 より
講演はロシア語----日本語通訳あり
参加無料・要事前申込→
お問合わせは
熊野谷葉子 研究室 kumanoya@keio.jp
セルゲイ・ボサドのマトリョーシカ博物館
日本の人形七福神
進上氏 氏
主催: 日露美術工芸とマトリョーシカ研究会 後援: 慶應義塾大学教養研究センター

Proust and World Literature: A Zoom of One's Own, Take One
"Re-reading Samuel Beckett's 'Proust'"
Yoshiko Tajiri, University of Tokyo
"Reading Proust"
Motonoji Sato, Keio University
"Marcel Proust Through the Lens of the East"
Mary Shuk-Han Wong, Lingnan University
"The Proust of the East"
D. A. Miller, University of California, Berkeley
Motonoji Sato, Keio University
D. A. Miller, University of California, Berkeley
プルーストと世界文学——自分だけのズーム、テイク1
佐藤元状 (慶應義塾大学) 2020年11月14日 10:00-12:00
「自分だけのズーム」(A Zoom of One's Own)と題したグループ/UKなオンラインイベントを続けていくことになりました。キックオフとなる今回は、プルーストをヨーロッパのみならず、アジアやアメリカから読み直すことを目的として、書評から作家・批評家の Mary Shuk-Han Wong を、カリフォルニアから文学研究・批評家の D. A. Miller を、東京から文学研究の臨床方面をお話し、プルーストについて、プルーストを再考する機会についてお話しさせていただきます。参加希望者は事前にメールをお知らせいたします。使用言語は、英語になりますが、質疑は日本語でも構いません。
お問い合わせ: motonoji@keio.jp 編集: 慶應義塾大学教養研究センター

I. 研究関連プロジェクト

研究成果公表

<選書刊行記念企画>

著者と読む教養研究センター選書

—第1回「理性という狂気——G・バタイユから現代世界の倫理へ」—

本企画は教養研究センター選書の広報策として新しく立案され、初回は2020年11月2日に、最新刊『理性という狂気——G・バタイユから現代世界の倫理へ』（2020年3月31日刊行）をめぐって開催された。同書の著者・石川学氏（商学部専任講師）、ならびに石川氏と同じくフランス思想を専門とする渡名喜庸哲氏（立教大学文学部准教授）および荒金直人氏（理工学部准教授）が登場し、石川氏の著作に関して3者おのおのからコメントが述べられた後、参加者と登壇者の間で質疑応答が行われた。

コロナ禍のもと本企画は対面・オンライン混合形式で実施された。対面式には23名、オンライン方式には60名が参加し、終了予定時間を大幅に超えて活発な議論が展開された。対面式会場（来往舎シンポジウムスペース）への入場者は塾生および慶應義塾教職員のみに限定し人数制限もあったためオンライン形式を併用したのだが、これにより塾外からの参加があったり動画配信が好評を博したりするという成果がもたらされた。動画配信はリアルタイム配信を見られない塾生から事前に要請があったため急遽実施を決定した。期間を11月25日から17日間として配信を開始したところ、終了間近になっても閲覧数が減少しなかったため2020年度末まで期間を延長し、最終的に延べ280名が閲覧した。

本企画には受付開始直後から続々と学生の申込があった。当日の会場では熱心にノートを取ったり鋭い質問をしたりする彼らの姿から、大半の授業がオンライン化し行事がことごとく中止に追い込まれるという状況下で、彼らが直に知的対話を交わすことを渴望していたことがありありと感じられた。アンケート結果（動画閲覧者も含めて計33名が回答）からもそれは読み取れた。

本企画は、学生と研究者が1冊の書物について言葉を駆使して議論を尽くす共通の場を作ること、すなわち、「専門家集団」である登壇者たちと「初学者」である学生が同じ土俵に上がって議論を交わす

ことも目標としたが、アンケートへの回答からこれは成功したと言えるであろう。初めての試みだったことに加えオンライン形式採用が急に決まったため解決すべきことは多かったが、センター事務局と所員が共に知恵を絞って無事に終えることができた。改善すべき点もあるが、今後も安定的な継続が望まれる。

（瀧本佳容子）



著者と読む 一選書刊行記念企画

教養研究センター選書

第1回 理性という狂気
——G・バタイユから現代世界の倫理へ
石川 学

「教養研究センター選書」とは、教養研究センター所員が独創的な論考を平易なスタイルで紹介する、個性ある魅力的なシリーズです。諸国の文学、言語、哲学、芸術表現、社会学など、様々な学部に所属する所員の多様な関心を反映して、多彩なテーマで刊行されています。

「著者と読む教養研究センター選書」とは、このたび教養研究センターは「教養研究センター選書」をより広く知ってもらうことを目的として、「著者と読む教養研究センター選書」という企画を始めます。第1回は、今年刊行されたばかりの『理性という狂気——G・バタイユから現代世界の倫理へ』（慶應義塾大学出版会）をめぐって開催されます。著者である石川学氏、石川氏と同じくフランス思想を専門とする渡名喜庸哲氏および荒金直人氏が登壇し、各自からのコメント、3人によるディスカッションおよび参加者との質疑応答を行う予定です。

『理性という狂気——G・バタイユから現代世界の倫理へ』：ジョルジュ・バタイユというもはや古典的とも言える思想家の生涯と思想を丁寧に読み解いたすぐれた研究で、ともすればバタイユをエキセントリックだと決めつけがちな読者の目から鱗を取ってくれるような論考です。文章は正確かつ明晰で、難解なバタイユの思想を解説する筆致は繊細です。人間の理性に対するバタイユの批判を今日のかつ未来をも志向する文脈において論じた、古典を読むことの意義を実践的に示した著作でもあります。本書を世界が「関連感」に覆われた現在の状況下で読み込むことは、私たちにとって貴重な経験となり、かつ、本書の意義にかなう行為ともなでしょう。

日時：2020年11月2日（月）16:30～18:00
<登壇者> 石川 学（慶應義塾大学商学部 専任講師）
渡名喜 庸哲（立教大学文学部 准教授、慶應義塾大学商学部 非常勤講師）
荒金 直人（慶應義塾大学理工学部 准教授）
<司会> 瀧本 佳容子（慶應義塾大学商学部 教授）

■参加形式 ★要事前申込み★
①対面参加（40名まで）
◎日吉キャンパス来客者1階シンポジウムスペース
対象：塾生・慶應義塾 教職員
②オンライン参加（Zoom）対象：どなたでも可

<申込み>
<https://bit.ly/33gthg4>
※対面でもオンラインでも事前申込みをお願いします。

■主催：お問合せ
慶應義塾大学教養研究センター tds.wase-u@nishi.kao.ac.jp
<http://lib-arts.kao.ac.jp/>

11/2 Mon
16:30～18:00

研究交流 研究の現場から

教員が自身の研究内容を自由に語る企画で、参加者による議論も活発に行われる。

2020年度は秋学期に3回、Zoomによるオンライン形式で開催された。

■第1回 2020年11月18日（通算第28回）

講師：縣由衣子（外国語教育研究センター）

「ミシェル・セールの初期思想——複数の結び目を作る」

縣先生は、フランスの現代思想家セールの思想について、個人的な出会いのエピソードも交えながら解説された。複数の学問領域をまたにかけ、人文的モデルと自然科学的モデルをつなぎ合わせ

る結節点の概念が強調された。『コミュニケーション』など初期の論考を中心としたお話で、知のあり方に序列を設けず、結び目を結んで解くセールの作業に、広範な知を自由に行き来する興奮を味わうことができた。

■第2回 2020年12月9日（通算第29回）

講師：石川大智（理工学部）

「英国唯美主義と好奇心」

石川先生は、「好奇心 curiosity」のあり方についてソクラテスの時代から概観し、中世までは病のイメージだった好奇心が近代からは知的、芸術的な営みとしてとらえられるようになった経緯をたどった。後半は、ウォルター・ペイターらを中心とする19世紀のイギリス唯美主義がトピックとなった。参加者の間では、芸術の理想化とコスモポリタニズムの可能性、またその反動としての無気力や帝国主義との関連性が議論された。

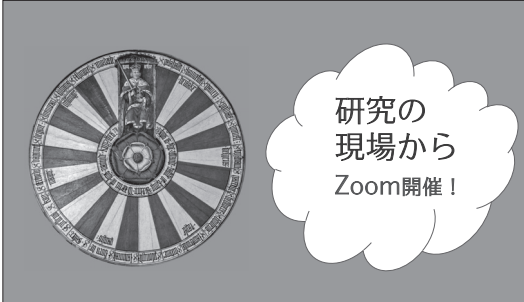
■第3回 2020年12月23日（通算第30回）

講師：石田真子（理工学部）

「知覚的補完：錯聴と空耳の科学——騙される脳」

石田先生は、聞くという行為の上で、不完全な情報を脳が知覚的に補完して理解している様の解説を行った。人間がどのように音声を認識しているのか、音響情報が途切れたりする場合に、どのように欠落を補っているのか、その検証と実験の方法や結果がわかりやすく紹介されて、脳神経科学の発達ぶりに驚きがあった。言語学、心理学などの他領域の協働で一段と開拓のできる領域であることが示された。

（高橋宣也）



「研究の現場から」は研究者交流サロンとして、教員の研究分野や関心事を紹介し、和やかな雰囲気でお話する会です。学部や分野を越えての交流も深められます。

第二十八弾 11月18日（水）18:15～20:00 Zoom開催
縣 由衣子（外国語教育研究センター 助教）
「ミシェル・セールの初期思想 —— 複数の結び目を作る」

日吉キャンパスでは、大勢の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。お互いの研究を知り、情報を交換し合うことで、さらに素敵なアイデアが生まれることもあります。何より、まず知り合いになることが、より豊かな研究教育への第一歩だと教養研究センターは考えます。
※お申し込みは、高橋宣也（文） nobuya@keio.jpまで事前にご連絡ください。

主催：教養研究センター toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

1 設置科目

2020年度は、2019年度末から急激な世界的広がりを見せていった疫病禍に呑み込まれるように始まった。その影響はあまりに広汎で、むろん教養研究センターも例外ではありえなかった。センターの設置科目として2020年度に予定されていたのは、別掲の表の通り、17コマである。例年同様の規模と言える。ところが疫病禍によって、実際に開講されたのは、10コマにとどまった。7コマを休講にせざるを得なかった。しかも休講となった講座はすべて、春学期に行われるはずのものであった。春学期に開講されたのは、「日吉学」と「身体知・音楽Ⅰ—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—」、及び春学期の扱いだが実際は夏季休暇中開講の「身体知」とどまる。

そうなったのは、2020年3月13日に成立した新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づき、4月7日から日吉キャンパスの所在する神奈川県を含む7都府県に緊急事態宣言が出され、同宣言の対象範囲は4月16日に全国に拡大されて、結局、神奈川県は5月25日まで同宣言下に置かれたからである。そうした状況の中、感染防止の観点から、生身の対面による授業は、大学全体として著しく制限されることとなり、先述の規模の休講につながった。

そもそも当センターの授業の歴史は、大学の授業

のいわゆるマspro化に抗し、片側通行的にならざるを得ない大教室における講義と違った形態の科目をデザインし実践しようとして、重ねられてきたものである。少人数・双方向・参加型というのが、当センターの設置授業の本分である。そんな長所が、疫病禍によって封じられ、短所に化けてしまったところがある。

もちろん、オンライン授業と少人数参加型授業は矛盾するものではない。教員と学生に必要なスキルがあり、通信環境にも恵まれていれば、授業内容によっては、対面よりもスリリングな`教育現場、をオンラインで作り出せもするだろう。だが、そのような転換を機敏に行えるだけのスキルが、残念ながら春には足りてはいなかった。そこで秋を念頭に置いて態勢を整え直し、秋学期は結果として予定の授業をすべてやり終えることができた。やはり関係各位の努力の賜物である。記して感謝したい。そしてこの経験は2021年度に大いに生きるはずであった。が、2020年度夏に、当センターの設置授業運営のための大黒柱であった極東証券株式会社からの御寄付が同年度までで終わると決まり、とりあえず2021年度は設置科目の縮小を迫られることになった。困難な時代は続く。

(片山杜秀)

2020年度 教養研究センター設置科目

科 目 名	学期・曜日・時限	開講／休講
アカデミック・スキルズⅠ—知の基礎を築く— (英語版)	春 火 5	I (春学期): 休講 II (秋学期): 開講
アカデミック・スキルズⅡ—知の基礎を築く— (英語版)	秋 火 5	
アカデミック・スキルズⅠ—知の基礎を築く—	春 水 5	
アカデミック・スキルズⅡ—知の基礎を築く—	秋 水 5	
アカデミック・スキルズⅠ—知の基礎を築く—	春 木 5	
アカデミック・スキルズⅡ—知の基礎を築く—	秋 木 5	
アカデミック・スキルズⅠ—知の基礎を築く—	春 金 5	
アカデミック・スキルズⅡ—知の基礎を築く—	秋 金 5	
身体知—創造的コミュニケーションと言語力—	春・特定期間集中	開講
生命の教養学—記憶—	春 金 3	休講
身体知・映像Ⅰ—物語を読む、見る、映像化する—	春 月 5	休講
身体知・映像Ⅱ—物語を読む、見る、映像化する—	秋 月 5	開講
身体知・音楽Ⅰ—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—	春 火 5	休講
身体知・音楽Ⅱ—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—	秋 火 5	開講
身体知・音楽Ⅰ—古楽器を通じた歴史的音楽実践—	春 土 2	開講
身体知・音楽Ⅱ—古楽器を通じた歴史的音楽実践—	秋 土 2	開講
日吉学—日吉と戦争—	春 火 5	開講

1 設置科目

1-1 アカデミック・スキルズ

[極東証券寄附講座]

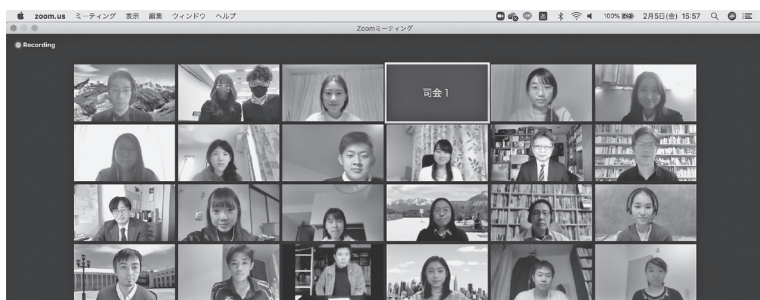
アカデミック・スキルズは、少人数制で、なおかつ多対多をセールス・ポイントとしてきた授業である。アカデミックなスキルと言ってもいろいろあるが、本授業は、論文の作成法とプレゼンテーションの仕方を二本柱とする。日本語版だと、春学期には4000字、秋学期には8000字の論文を、英語版ならそれに相当する語数の論文を、履修者の得手とするテーマから自由に選んで仕上げてもらおう。それに伴って論文の内容について発表もしてもらおう。論文の書き方なら、テーマの見つけ方、参考文献の探し方、章立ての仕方、論文に相応しい文章の作法、註の付け方などを細かく指導する。しかも学生同士のグループ・ワークを重んじる。幕末の私塾以来、慶應義塾の伝統としてある「半学半教」の精神と実践を現代に生かす。互いに互いを批判し合い、教え合い、学び合う。そこに複数の教員も加わる。各クラス20名前後の履修者を担当する教員は2～3名。さらにティーチング・アシスタントを付けもする。多対多とはそういう意味である。小教室での濃密な対面形式による対話的で双方向的な授業のひとつの極みを目指してきた授業と言ってよい。

ところが2020年度は疫病禍に見舞われた。経験豊富な教員ばかりで固めて居れば、いきなりオンラインでも対応し得たかもしれない。しかし、担当者には初めてのの方々も含まれている。教員も授業のやり方を現場で覚えて行くのがこの授業である。学生のみならず教員にもスキルを工夫し学んでもらって、他の授業にも広めて活用して欲しいというのが、趣旨としてある。なので、いきなりオンラインで始め、どのタイミングで対面に切り替えられるかもわからず、しかも通年の授業として教員と学生のモチベーション、及び授業のクオリティを保ち続けられるかとなると、疑問が残った。そこで春学期は休講とし、秋には対面によって行えるのではないかとの期待もあり、秋学期に懸けることにした。

結果、開講されたのは、日本語クラスが3つ、英語クラスが1つ、すべて秋学期のみである。担当教員は、水曜クラスが、片山杜秀（法、採点責任者）、北川千香子（商）、宮本万里（商）、木曜クラスが、石川学（商）、小林拓也（理、採点責任者）、治山純子（教七）、金曜クラスが、縣由衣子（外セ）、杉山有紀子（理、採点責任者）、諸橋英一（教セ）、英語クラス（火曜開講）が見上公一（理）であった。

蓋を開けてみれば、秋学期は不安なく対面で授業を行えるとは甘い見通しであったと言わざるを得ず、授業は対面とオンラインを適宜組み合わせで行われることとなった。また、履修者についても、例年なら授業の特殊性に鑑みて書面等によって希望者の意欲を見定め先行するのだが、そうした手続きは取れず、学生部任せの抽選となった。だが、案ずるより産むが易し。半期で通年分の成果を上げようと、どのクラスも履修者への負担は高かったはずなのだが、最終論文が年度末の論文集に掲載されて単位取得に至った者を数えると、水曜クラスが15、木曜クラスが11、金曜クラスが16、英語クラスが4となって、総じて脱落率は例年よりも低いと言える。特に木曜クラスの成果は通年の場合と比して遜色が無かった。年度末の論文コンペティションは例年通りの進行で、プレゼンテーション・コンペティションについてはオンラインで、無事行うこともできた。アカデミック・スキルズの今後についても深い示唆のあった秋学期だった。

(片山杜秀)



2020年度極東証券寄附講座

Academic skills
アカデミック・スキルズ

Presentation
プレゼンテーション

Competition
コンペティション

2月5日(金) 13:00~16:00

オンライン (Zoom) ※参加費等の詳細はwww.kaiyodai.ac.jpまでお問い合わせください。ZoomのURLを共有いたします。

発表者: 2020年度「アカデミック・スキルズ」クラスII代表者

学生が一年間培ってきた「知の探求力」を遺憾なく発揮します

主催: 慶應義塾大学教養研究センター お問い合わせ先: kaiyodai@ednet.keio.ac.jp

Ⅱ 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-2 生命の教養学

—休講にあたって

【極東証券寄附講座】

2020年度の「生命の教養学」は新型コロナウイルスの感染拡大によって、厳しい対応を迫られることとなった。とりわけ3月後半以降、刻々と変わる流動的な情勢下で関係各所との協議を重ね、各講師の出講日程の再調整、秋学期への延期、オンライン開講など、さまざまな可能性を検討した結果、最終的には休講という判断に至った。多くの外部講師の「招聘」で成り立つ本講座の場合、どのような変更が生じるにせよ、まずは講師全員の事前承諾を得る必要がある。そこで万が一辞退者が出れば、代講や講義回数の削減によって帳尻を合わせなくてはならない。同じテーマと布陣では二度と開講できない「一点もの」の授業だからこそ、企画委員長として、急拵えの消化試合にはしたくないという強い思いがあった。それは、学生の履修機会を奪わないという大学の基本方針は承知のうえで、もともと予定していた「記憶」というテーマを本来の形で、あるいは遠隔であってもより練度の高い授業として実現することを期しての苦渋の決断であり、幸いにも関係者からはご理解を賜ることができた。この間に複雑かつ繊細な相談に応じてくださったすべての方々に、この場を借りてあらためて感謝申し上げたい。

その後、講座再開に向けた企画委員会を9月中旬

に開催したが、折しもその直前に極東証券株式会社の寄付の終了が決定された。それを踏まえて交わされた委員会の議論では、各委員から本講座の意義と必要性に鑑みて寄附講座の終了を惜しむ声が聞かれる一方、これを一つの区切りと前向きに捉えてあらためて講座内容を練り直し、新たな寄付元が見つかった際の再出発を期すべきとする意見も多く挙がった。この結果を受けて、従来での「生命の教養学」は2020年度でいったん終了とし、今後は荒金直人副所長と西尾が中心となって後継企画や新講座設置の可能性を検討していく方針が確認された。

現状としては、残念ながら新たな寄付元の目処は立っておらず、さしあたりは規模を縮小した形で2022年度より講座を再開する方向で検討が進んでいる。講座の一つの「目玉」であった講義録の作成が予算の制約上困難になるなど、講座内容の一定の見直しは必要になるが、文理横断型のオムニバス講義を継続的に開講する意義はやはり大きく、限られた予算規模のなかでの試行錯誤の経験から、新たな展開の可能性を模索していきたいと考えている。

(西尾宇広)

1 設置科目

1-3 身体知

—創造的コミュニケーションと言語力

[極東証券寄附講座]

2020年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延により、通信教育課程の夏期スクーリングもオンラインとなった。誰もいないキャンパスで、かえって身体知の授業は、距離をとって行えば可能となるか、とも思ったものの、通信教育課程の方でも授業はすべてオンラインとなり、通学生の授業も春学期はすべてオンデマンドが推奨されたために、その方針に従わざるを得なくなった。

この状況がこれからどれほど続くのかが見えてこないまま、授業の運営を考えていかざるを得ない。そしてこのような状況だからこそ、他者とつながる「身体」を意識できる授業が必要だと考え、オンラインによる集中型授業の開催（8月11日～16日）に踏み切った。

しかし、身体知の醍醐味はやはり対面で他者の存在に向き合うことにある。残念なことにオンライン授業に切り替わったことで、開講日までに3分の2の通学過程の学生が履修を取り消した。それでも残った4名の通学生（全員1年生）と通信教育課程の7名によるクラスは、毎日が新しい実験と発見の連続となった。

その意味で、授業はまさに今年のテーマ、「他者とつながる」に自然と集結していった。扱った題材は大きく分けて3つ。まずはアメリカの詩人、E. E. カミングスの詩、「今はちょうど（[in Just-]）」から読んでいくことにした。春の明るい光景の裏に潜む暗い世界に気が付くと、読み方は変わってくるだろうか、という「声」の発見から始め、詩の世界をそれぞれ絵画として思い浮かべた後で、言葉の裏にある今一つの物語を読み解いていった。続いて、詩人の朝吹亮二氏の未発表作品「絵本のための断片」、6篇を読む。まずは何度も朗読し、その後、お互いの解釈を語り合い、深めることで、言葉の世界をさらに広げていった。その後、気に入った詩をそれぞれ絵画にすることで、言語と芸術表現を結び合わせる作業を行った。ちょうど終戦記念日のころということもあり、戦争につなげて絵を描いた参加者もいれば、詩から読み取れる自然の力を描いた参加者もあり、参加者は互いにたくさんの刺激を交換し合うことが可能となった。そこから今度は自分の思い出や心象風景を詩にする作業へと移る。作者を

明かさないうまま、それぞれが他者の詩で気になるものを選び、朗読をするという経験を経ると、自らが書いたものの世界もまた異なって見えてくる。言葉による表現を仲介に、他者との交流の新しい在り方を提示できた。最後に取り上げた教材は、ジョー・ミノの「囀る高麗鶯だったあの子」である。短いながらも、言葉にできない個人の思いや哀しみを大きな歴史という行間に込めたこの作品を解釈し、朗読劇をオンライン上で作成した。

最終日には外部からの観客もオンライン上に招き、ジョー・ミノの作品と各自の心象風景を基にした朗読劇を披露した。口コミであったにもかかわらず外部から多くの観客が参加してくださった。また今年も朗読のみならず、ヒップホップや絵画と盛りだくさんの内容となった。今回も通信生と通学生が共に協力し合って各自の言葉の世界を様々な形で広げることができたことは、例年にも増して顕著だった点である。

オンラインによる身体知は初めての試みであったが、各自の声に個性がにじみ出て、その身体性に合わせた解釈や創作、そして創造力を活かした演出が可能となったことは本年度の夏の身体知の大きな収穫であった。オンラインでは、他者の存在を間近に感じることはできないものの、かえって「声」の存在が顕在化し、新たな身体知教育の可能性を拓くことができた。

しかし、やはり残念だったことは、毎年この身体知を通じてできあがるアカデミック・コミュニティが今年は構築できなかったことである。毎年夏の「身体知」の集中講座の参加者はアカデミック・コミュニティを築き講座終了後も長いことその交流が続くのであるが、やはりオンライン上でのコミュニティ形成は、かなり意識したうえでないと自然には構築できない。この点は今後の大きな課題となる。

教育の中での身体の意義は何か。リモートによるクラス運営の中でその身体性をより意識した取り組みは可能であるのか。これらの大きなテーマに今後取り組んでいく良いきっかけとなった集中講座であった。

(横山千晶)

1 設置科目

1-4 身体知・映像

[極東証券寄附講座]

2020年度の春学期は、新型コロナウイルス感染症により、「身体知・映像」クラスは休講せざるを得なくなった。このクラスではグループワークを中心として、機材を使いながら映像作品制作を行うために、対面での活動は必須である。感染症の概要がまだはっきりとしないまま授業を行うことの危険性に加えて、大学からのオンデマンド授業の推奨を経て、講師陣で決定を下したわけだが、その間に、秋学期の開講について、あらためて考える必要があった。

その後極東証券株式会社からの寄付の終了に伴い、本講座も来年度は閉講と決まった夏の時点で、講師一同、秋学期の開講を決意した。毎年前期は撮影の基礎を学び、シナリオの書き方、グループによる役割分担と3者関係に基づいた短い映像作品を制作し、後期は文学作品の翻案に取り組むというカリキュラムを組んでいたが、今年は秋学期のみで撮影の技術を学び、脚本を書いてオリジナル作品を作るという欲張った計画ですすめざるを得なかった。コマ数が12コマと例年より少ないのみならず、他のオンライン授業との兼ね合いなど、学生たちにとっては限られた時間の中で作品を制作することは非常に大変な作業となった。今回は二つのグループに分かれ、各自がいくつもの役割を担いながら、シナリオを作成し、グループで話し合い、撮影を行っていったが、その店舗は大学の外の店舗であったために感染症予防のためにはその店舗の協力を得ることになった。

興味深いことに、二つのグループのアプローチは全く異なっていた。監督が明確に作り出したい世界をもっていた班では、その監督の意図を皆でくみ取り、さらに観客に伝わりやすくするために、何度も話し合いが行われた。他方のグループは、みんなで一から作り上げるという方式を取り、役割のはっきりとした分割というよりは、全員のコンセンサスのもとに制作を進めていくという方式を取った。こうして出来上がった二つの作品、「しょうこ」と「みき」はグループワークのそれぞれの形とメンバー協力のたまものとして、見ごたえのあるものとなった。

「しょうこ」はLGBTQ+の話題に触れつつも、決してシリアスにならない軽快なテンポで進む親子関係の話。父親自身がLGBTQ+の当事者であるとの設定は、物語にいくつかのひねりを加えた出来

上がりとなった。何よりも楽しみながら撮影を行っている様子が伝わってくる作品であった。「みき」は成長と友情の物語。高校時代の友人同士が、大学生になり、互いの知らない暗部に気が付くとともに、関係性に溝が生まれていく。相手に期待されている自分のイメージとの乖離とそれを埋めようとする努力。自分のコントロール下にあったはずの友人に乗り越えられていくという焦り。等身大の大学生の姿を描きながら、凝った映像と構成力で深みのある世界観を描き出した。

2月6日の作品上映会では外部からの参加学生も迎えて、苦労話も含めて様々な意見交換がなされたが、あらためてこの上映会において、出来上がった成果物の披露のみに終わらない、真の議論が可能となったと言える。撮影とは、一人だけでは行うことができないこと。そして「身体知・映像」クラスの真髄は、このグループワークの構築にあったということがあらためて明るみに出された授業に今年になったと言える。2作品と上映会当日の質疑応答の様子は講師の一人である山田健人監督が撮影・編集し、教養研究センターが配信した（塾内限定・配信期間は3月10日から3月31日まで）。

そしてなんとといっても本年度も山田健人監督と坂倉杏介先生（東京都市大学都市生活学部）のお二人を講師に迎えて学生たちを支えることができたこ



とには感謝の言葉しかない。この講座の立ち上げから伴走してくださった坂倉杏介先生、学生時代にこのクラスにもぐりで参加し、現在は新進気鋭の映像作家として活躍する山田健人監督のお二人との協力で「身体知・映像」は毎年多くの学生たちを育ててきた。その中にはすでに映像制作活動を展開してい

る人々も数多くいる。本年度をもって「身体知・映像」は一時閉講となるが、このクラスの受講者から次世代の映像作家や脚本家が生まれることを心から期待したい。

(横山千晶)

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-5 身体知・音楽

【株式会社白寿生科学研究所寄附講座】

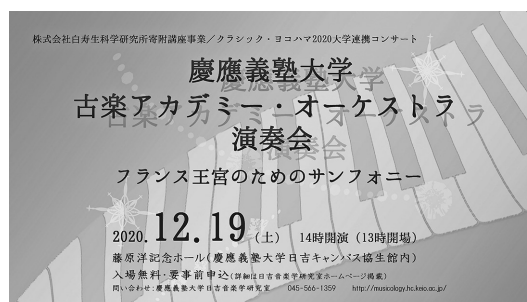
教養研究センター設置科目である「身体知・音楽」では、株式会社白寿生科学研究所からの寄付を受けた寄附講座として、2020年度においては従来通り、2つの授業が開講される予定であった。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」（器楽クラス）であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」（声楽クラス）であった。しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大防止措置のため、飛沫感染が特に心配された声楽クラスは、2020年度学期開始前である3月に、春学期の開講を断念し、秋学期開講のみとすることにした。その一方で器楽クラスは、通常の形態で授業を開始できると見込んだが、結果としては、大学の授業のすべてがオンライン化されたため、対面での授業は行うことはできなかった。履修者を少人数グループに分け、オンライン会議のツールを介してレッスンを行うということのみが実施できた。秋学期からは、実践的な授業の対面での開講が許可されたため、感染症拡大防止の措置を十分に取って、器楽クラスおよび声楽クラスの両方において、通常形で授業を行った。なお、2020年度においては、例外的に、両授業を経済学部教授の石井明が担当した。これは、2020年度より日吉に着任した、木内麻理子商学部専任講師（音楽）に2021年度より声楽クラスを受け持ってもらうことになっているための、経過措置であった。

2020年度の器楽クラスは、前年度同様、30人規模のバロック・オーケストラが編成された。古楽器のみを使ったこの規模のオーケストラは非常に珍しく、一般大学だけでなく音楽大学でこのようなことが授業として行われている事例は日本では無く、また、常設のプロの演奏団体すらこのような大きなアンサンブルは、国内ではほとんど見ることがない。授業の成果発表演奏会については、春学期の授業がオンライン化となってしまったため、例年春学期の終了する時期に行っている室内アンサンブルのコン

サートの開催は断念するしかなかったが、年度末の演奏会は、感染症拡大防止の対策を十分に図った上で12月19日に開催した。しかしながら、感染拡大が見られた時期でもあったため、入場制限下での催し物となった。その一方で、できるだけ多くの方々に授業の活動を見てもらうために、YouTubeを介して、演奏会の模様をライブ配信した。このようなことは初めての試みとなったが、新しい可能性を見出す結果となったのは間違いのないと思われる。

声楽クラスは、秋学期のみの開講となったことにもより、履修者の数が12名と例年より少なかった。しかしながら、少人数のメリットを生かして、きめ細かな授業の運営ができる結果となった。成果発表の演奏会は、12月22日に行い、こちらも器楽クラスの演奏会同様、入場者の制限を行った関係もあり、YouTubeを介したライブ配信を行った。

（石井 明）



II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-6 日吉学

[株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座]

コロナ禍によって学事暦の変更および対面形式の可否が不確定な中で、体験とフィールドワークを重視する日吉学は、いかにオンライン授業の中で双方向性を担保できるのか、担当教員はその手法をめぐり何度も議論を繰り返した。BOXを活用し事前に講義資料を配布し、通信環境に影響されにくいチャットアプリでディスカッションを深め双方向性をめざした。結果的に今日、教育手法として注目される「反転学習」を実現したと言える。また講義資料には、ディスカッションに触発された学生の多様な関心に対応するように、教員の研究と教育の積年の成果が惜しげもなく提供され、例年以上に充実した内容となった。オンライン授業の取り組みは電子版塾生新聞に掲載された。

2020年度のテーマは「日吉と戦争」、終戦75年を顧み、「連合艦隊司令部の地下壕はなぜ日吉台に建造されたのか」という問いに様々な観点から挑んだ。慶應義塾の歴史(福澤研究センター 都倉武之)、日吉の森の地形や地質(経済学部 有川智己、慶應義塾高校 杵島正洋)、戦争遺跡の保存のあり方(慶應義塾高校 阿久澤武史)、沖縄戦と日吉の司令部の

関わり(元普通部 太田弘・文学部 安藤広道)など様々な視点から、講義が行われた。学生は前日に公開される講義資料で事前学習、当日はチャットで60—90分間議論をし、グーグルフォームによってその日のキーワード3点に100字を添えて返送し、最終レポートのテーマ絞りを進めた。後半はアカデミック・スキルズ(法学部 大出敦・経済学部 不破有理)の演習を交え、学生は中間・最終報告で学生・教員からの質疑に向き合い、さらにそれらの質疑を踏まえて修正を繰り返してレポートにまとめた。最終日にZOOMで笑顔の学生たちから「日吉という題材からこれほど幅広く考えられるのが新鮮な驚き」「アメリカの大学にありそうなアクティブな授業で楽しかった」「異なる見方の人の意見に触れられ刺激的で思考の訓練にもなり大満足」という感想が寄せられたのは教師冥利に尽きる。

フォローアップとして9月26日にフィールドワークを実施、第一校舎および日吉の森、日吉の寄宿舎と米軍によって改装された浴室に残る歴史の痕跡を体感し、日吉学修了証を授与して2020年度の日吉学を締めくくった。(不破有理)



寄宿舎入り口で都倉武之先生の話を聞く学生たち*



学生寮付設浴場・通称「ローマ風呂」跡*

塾生新聞5月号に授業の様子が掲載されました



日吉の地層の生成を説明する杵島正洋先生



※いずれも、普段は公開されていません

2 実験授業

2-1 庄内セミナー

庄内セミナーでは、例年8月下旬から9月初めに山形県鶴岡市で、市役所のご協力のもと「庄内に学ぶ生命（いのち）」をテーマに、約20名の学生が現地に赴き、講演・参加者同士の議論・論語素読・修験体験などを通じて生と死の問題を考えてきた。

ところが2020年度の春学期は大学の主役である学生たちの姿がキャンパスから「消える」という波乱の幕開けとなり、第11回目となるはずの庄内セミナーも、春学期早々に中止が決定した。県を跨ぐ長距離移動や密な集団行動を伴う宿泊行事となれば致し方ない。

しかし小菅隼人教養研究センター所長から、何とか庄内セミナーの活動を止めないよう限られたスタッフで現地に赴いて講師の方々の講話を収録しようという提案があった。幸いなことに、過去に登壇下さった3名の方々にご快諾頂き、小菅所長・大古殿事務長・幻の実行委員長鈴木で9月初旬に庄内に伺い収録を行った。

まず庄内文化の奥深さとだだちゃ豆の美味しさを毎年教えて下さる郷土文学研究家の東山昭子先生に、坂茂氏設計のスイデンテラスで黄金色の水田と鷺をバックに「庄内の風土—近代黎明期を拓いた女たち」というテーマでお話頂いた。それは自己研鑽と社会貢献を両立させ日々の活動を丹念に記録した明治期の庄内婦人の生き様にとどまらない、今日の東山先生のお姿に繋がる講話であった。

旧庄内藩主酒井家第18代当主で致道博物館館長の酒井忠久様の講話の収録は、館内の旧庄内藩主御隠殿で、早くも数葉の楓が紅に染まり息をのむほど美しい庭園を背に行われた。酒井様の幼少期からの成長の軌跡や、過去から未来へと続いていく庄内への思い、そしてこのコロナ禍を生き抜いてゆくことについて、小菅所長との一問一答形式で語って頂いた。

そして、鶴岡シルク株式会社代表取締役の大和匡輔様には松ヶ岡開墾場でお話を伺った。開墾記念館で先人たちの苦勞の末に日本のシルクの北限の産業拠点として発展した松ヶ岡の歴史をご説明頂いた後、由緒ある松ヶ岡本陣の中で、来たる循環型経済を支えるシルクの可能性について熱く語って頂いた。

鶴岡市のログスタジオ柳田貴紀様には、収録のみならず、随所にテロップや写真を入れるという編集上の要望に何度も応じて頂き感謝に堪えない。難しい状況の中、今回の収録にご協力くださった皆様に厚く御礼を申し上げる。一人でも多くの方に講話動画をご覧頂ければ幸いである。

動画 URL : <https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/shonai/procedures.php>

(鈴木亮子)

庄内セミナー
▲ 庄内セミナーとは
📄 最新の実態要項
📅 活動記録
👉 寄付金・ご協力
✉ お問い合わせ

[🏠 今年度の実施要領](#)

教養研究センター主催
「庄内セミナー」特別講話（動画）の公開について



2020年度の庄内セミナーは、新型コロナウイルス感染症状況を鑑み、残念ながら開催を見送りました。教養研究センターでは、2021年度の再開に向け、今後に行われる企画として、毎年セミナーの講師をお勤めいただいている庄内で活躍されている方から、特別に庄内まつわるお話しをしていただきました。セミナーの参加を考えている学生はもちろん、すべての学生にとっても参考となる内容になっています。ぜひ、ご覧ください。

2 実験授業

2-2 情報の教養学

「情報の教養学」は、近年の高度情報化社会の急速な発展における最新的话题を提供することを目的とした講演シリーズである。2020年度は、3本の講演（それぞれ約30分）を動画として収録し、YouTube上で公開した。例年は、春学期3件、秋学期3件の講演を日吉キャンパス内で開催していたが、2020年度は新型コロナウイルス感染症のため、キャンパス内での講演会の実施を中止し、動画を作成・公開することとした。

講演は福井健策氏（弁護士）が「オンライン社会を生き抜く著作権」というテーマを三つに分けて実施した。1つ目の講演は「とりあえず著作権の初歩を30分でマスターする」という題目で、どんなものに著作権があるのか、何をすると著作権侵害になるのか、著作権侵害を起こすとどうなるのか、誰が著作権という権利をもつのか、といった著作権の基礎を扱った。2つ目の講演は「動画配信・オンラインイベントを使いこなす」という題目で、動画の収録・配信に関わる権利について解説した。期限付きで著作物の利用を認めているケースや、条件付きで著作物の利用を認めているケースなどを説明するために、恋ダンス、ゲーム音楽、ゲーム実況といった具体例をとりあげた。また、著作権の例外が増えていることも述べた。3本目は「パクリと二次創作の境界を探ってみる」で、様々な例を通して、パロディや二次創作が著作権侵害になりうるかについて議論した。パロディに対する日本と欧米の考え方の違いをとりあげ、日本の場合は、敬意があれば侵害として訴えられない傾向があることを紹介した。最後に、二次創作やパロディを作成しやすくするため

にどうすべきかについて考察した。

3本の合計動画再生回数は延べ2725回（2020年10月20日～2021年2月23日）であり、注目されていることが伺える。また、2020年10月20日から12月末まで動画に関するアンケートをとった。回答数は21件と多くなかったものの、大変好評であった。

なお、動画は3本とも、情報の教養学のホームページ（<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/>）から視聴できる。（高田眞吾）

原厚義塾大学教育研究センター主催
2020年度情報の教養学講演動画

オンライン社会を 生き抜く著作権

10月20日(火)
動画配信開始
対象: 塾生・教職員

その1
とりあえず著作権の初歩を
30分でマスターする

- どんな情報が著作権で守られるのか?
- どんな利用に対してOKなのか?
- 誰がその権利を持つのか?

その2
動画配信・オンラインイベントを
使いこなす

- まずは配信に関わる権利をざっと復習
- 取ってみたい・避けてみたいの注視点
- ゲーム実況はできる?
- そのほか、許可なくできる配信とは?

その3
パクリと二次創作
の境界を探ってみる

- 著作権とパロディ・二次創作はどう違う?
- 法律の整理: 日本と欧米
- 日本特有のパロディ・ルールを挙げる

QRコードまたは
下記URLからアクセス
<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/talks/fukuikensaku-2020/>

「情報の教養学」では、「情報の光と影」に焦点を当て、情報の利用によるメリットやデメリットと共に、情報技術に囲まれる将来について、様々な分野の一流の講師に講演いただいています。

例年は1時間半の対面式講演会を開催していますが、2020年度は、**30分×3本のオンデマンド式講演動画を**配信します。福井健策氏（弁護士）による著作権の特別講演、是非ご覧ください！

福井 健策 @fukuikensaku
弁護士 (旧称: ニューヨーク州) / 日本大学法学部・神奈川大学法学部 客員講師
<http://www.kottolaw.com>

1991年東京大学法学部、1999年弁護士登録（第二東京弁護士会）、東北大学大学院法学部博士課程修了（社会科学情報システム学）、シンガポール国立大学マニラ校にて、情報・知能の法務顧問に就任。

著書に「改訂版 著作権とは何か」「誰が「私」を独占するのか」（講談社新書）、「エンタテインメントと著作権」全5巻（リクルー出版）、CD-ROM「著作権の基礎知識」（全5巻）、「日本の著作権制度」（全5巻）、「パクリと二次創作」「AIがつかえる社会」（文芸春秋）等。独立行政法人著作権協会代表理事、デジタルアーカイブ学協会理事、「本の未来委員会」運営委員、著作権・ITと社会政策研究会 理事、著作権に詳しい弁護士。

原厚義塾大学教育研究センター
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>
問い合わせ: tolawase-ib@dst.keio.ac.jp

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/>
Keio Learning

3 「学び場」プロジェクト

教養研究センターの設置科目であるアカデミック・スキルズは、大学生の学びのための基礎能力と言える、論文作成能力と研究発表能力を1年かけて養う授業である。それは、様々な学部で同様の授業が開設されてゆくきっかけになればよいとの含みもあって、デザインされ、開設されたものである。特色は少人数制であり、それならではの良さがあるが、センターとして運営できるのは3クラスか4クラスがこれまでの限度であり、1クラスが20名として1年で60名か80名が限界ということになる。大学の規模を考えれば、砂漠に水を撒くようなものかもしれない。

そこで、メディアセンターと連携して立ち上げられたのが「学び場」プロジェクトである。原則として、アカデミック・スキルズの履修を終えた者から選抜し、学習相談員（ピア・メンター）になってもらい、日吉のメディアセンターの1階のカウンターに「学び場」の窓口を設け、そこに座って、困っている仲間の学生の相手をし、レポートの書き方、論文の構成法、プレゼンテーションの仕方、ノートの取り方など、広く大学の勉強について、相談に乗る。そうやってアカデミック・スキルズでの学びを、他の学生に伝えてもらう。相談員には、豊富な経験を活かして新任の相談員を導く、古参の院生も含まれることも多いが、学部生が主役というのが「学び場」プロジェクトの理念であり、実際でもある。たとえばアカデミック・スキルズを学部の1年生で履修して、そのあとすぐ相談員に採用されれば、2年生でカウンターの業務に就く。2年生が後輩や同輩、場合によっては先輩を導く。大学が公式に制度化しての学習相談で、これほど学年がフラットになっているのは先駆的・画期的なはずである。他大学にも似た制度は多いが、ふつうは院生のアルバイトとして行われているであろう。

そうした意味で2020年度の学習相談員の構成は本来の趣旨をよく体现するものになった。メンバーは学部4年生4名（文、経、商、理、1名ずつ）、3年生7名（文3名、法2名、理2名）、2年生6名（文2名、法1名、理3名）の計17名。全員が近年のアカデミック・スキルズの履修者であった。そして頼りになる院生が居なくなっている。学部生

のみになったのは、この制度の長い歴史においても極めて珍しいことで、まさに制度の真価が問われる1年になるはずであった。

ところが疫病禍である。学習相談の活動は春学期には全く行えず、秋学期からとなった。正確には11月2日から12月25日までの平日午後である。11月24日からのひとつきは、オンラインでの相談も受け付けた。結果はどうだったか。総相談件数は16。すべてカウンターに持ち込まれた相談で、オンラインは0。窓口の開いたのべ日数は36なので、2日に1件を切る勘定となる。2019年度の秋学期の総相談件数は146。前年度比で約9分の1という落ち込みようである。だが、そもそもメディアセンターの入館者が例年同時期の約1割と報告されている。入館者数を考慮すれば、前年並みの件数となる。

したがって特に悲観すべきではないのだが、学習相談員になってくれたアカデミック・スキルズ既履修の学部生たちの力が示される機会がほとんどなく1年が過ぎ去ったことは、やはり残念でならない。

（片山杜秀）

塾生の 塾生による
 塾生のための
学習相談

感染対策も
 しております！
 (マスク着用、
 パーテーション設置、
 アルコール消毒)

オンラインでも
 相談できます！
 (Webexを使用)
 「学習相談のウェブページ」
 からアクセス

☆日時 11月2日(月)～12月25日(金) 平日 13～17時
 (実施日時はWEBサイトで確認してください。
 「日吉図書館 学習相談」で検索
https://libguides.lib.keio.ac.jp/hys_studyadvice

☆場所 日吉図書館1階 スタディサポート

☆利用方法 窓口へ直接お越しください。WEBからの予約も可能です。

☆共催 教養研究センター・日吉メディアセンター・日吉学生部

・レポートの書き方がわからない…
 ・注釈と参考文献の違いって？
 ・引用の仕方が不安…
 その他悩み、私たちがお答えします！

1 日吉行事企画委員会 (HAPP)

日吉行事企画委員会 (HAPP) は、日吉のキャンパス内外のコミュニティーを対象とした、もしくは新入生を歓迎することを主な目的とした行事を委員会で企画し、春および秋学期においてそれらを催している。また、秋学期においては、塾生および教職員から企画を募集し、審査を経て採択した催し物を主催している。なお、委員会で企画したイベントは、継続性の強い催し物を優先して開催している。

2020年度のHAPPが企画した催し物は計8つあった。これらには、毎年恒例となっている舞踏の公演、塾名誉教授や著名者による講演会、複数回の演奏会を含む「日吉音楽祭」、日吉メディアセンターの中でのコンサートが含まれていた。しかしながら、COVID-19の感染拡大に伴い、春学期において大学の授業はオンライン化され、日吉キャンパスは、一部の教職員を除けば、ほぼ無人の状態であった。このため、春学期に予定していた催し物はすべて、中止もしくは延期となった。

秋学期には、一部の授業が対面で行われることになり、少数の学生がキャンパスで授業を受けることにはなったが、感染症拡大の懸念から、学生、もしくは一般の方を招く形でのイベントの開催は、なかなか難しい状況となった。このため、一部の企画は中止となり、いくつかの催し物は無観客の状態でのライブ配信、もしくは録画したものを後日配信という形で実施され、新型コロナウイルス感染症拡大防止の対策を施し、入場者の制限および管理を行った上での開催までこぎ着けることができた企画は、たった1つのみという結果に終わった。また、公募企画については、春学期に募集を行うことができず、また、秋学期にイベントを開催できるかどうか不透明であったため、結果的に公募を中止した。

2020年度に、無観客ながらオンライン配信の形で実施できた企画は、「ライブラリーコンサート 2020 in 日吉」(10月21日および23日)と、講演会である「響き続ける「声」のものがたり」(11月28日)であった。録画の後、インターネットで配信を行ったのは、「笠井叡舞踏公演」(12月24日配信開始)であった。入場制限を行いながらも観客を入れ、同時にライブ配信まで行ったのは、「日吉音楽祭 2020」(12月13日)のみとなった。

2020年度は、HAPP主催の行事についてはその大半が、新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止に追い込まれ、日吉キャンパスを開かれた大学にし

ていくというHAPP本来の活動を目指すことができなかった。なお、HAPPの活動については、HAPPのホームページ (<http://happ.hc.keio.ac.jp/>) をご覧いただきたい。

(石井 明)

慶應義塾大学教養研究センター(HAPP) Hiyoshi Arts & Performance Project

新入生歓迎演奏会(物語の世界)no.6

響きつづける「声」のものがたり

いいしんじと聴く「義経千本桜」「源氏物語」

2020年11月28日(土)14時~16時(予定)

オンライン(ZOOM) [要事前申込]

参加費 無料

対象 塾生・一般

特に新入生を歓迎します

※1部は登録者による対談
※2部は登録者と参加者との質疑応答

主催 慶應義塾大学教養研究センター-日吉行事企画委員会(HAPP)
協賛 日吉メディアセンター
お問い合わせ HAPP事務局 happ@happ.keio.ac.jp

慶應義塾大学教養研究センター Hiyoshi Arts & Performance Project (HAPP)

同時LIVE配信あり!

日吉図書館 ライブラリーコンサート 2020 Library Concert

10.21 wed. 15:00~ 弦楽四重奏 Quartet

10.23 fri. 15:00~ ジャズ Jazz

1st Violin 本庄 篤子 2nd Violin 三木 希生子

Viola 阪本 奈津子 Cello 島根 明史

Guitar 井上 智 Organ 土田 晴信

Drums 高橋 敬

観客席はありません。館内に響く生演奏をお楽しみください。学生の入館には事前予約が必要です(上限あり・学内者のみ)

There is no seating available for the audience. Students need to make a reservation in advance to enter the library.

主催：慶應義塾大学教養研究センター-日吉行事企画委員会/日吉メディアセンター
お問合せ：日吉メディアセンター Tel.045-566-1040 / Email. hmc-refgroup@keio.jp

室内楽・ピアノ
マラソンコンサート

出演 慶應義塾大学 学生・一貫校生徒・教職員

Program

ショパン
ベートーヴェン
ラフマニノフ
ショパン
リスト
ドビュッシー
ショパン
ベートーヴェン
J.S. バッハ
シューベルト
ショパン
J.S. バッハ
ハルグオルセン
ショパン

ベートーヴェン 第1番
ピアノ・ソナタ第8番《悲愴》
ピアノ・ソナタ第2番（1931年版）
ワルツ第2番《華麗なる円舞曲》
《盗礼の年》第1年：スイスより第4曲《泉のほとりや》
《原曲》より第3曲《雨の庭》
ピアノ・ソナタ第21番《ワルトシュタイン》
半音階的幻想曲とブーガ=組曲
ピアノ・ソナタ第21番
ゴッホネズ第6番《英雄》
無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番より
I アルマンド・II サラバンド
バツカリア
スケルツォ第4番

2020. 12. 13 (日) 14時開演 (13時開場)

藤原洋記念ホール(慶應義塾大学日吉キャンパス協生館内)

入場無料・要事前申込(詳細は日吉音楽学研究室ホームページ参照)

問い合わせ: 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 045-566-1359 <http://musicology.ck.ac.jp/>

演奏会はライブ配信を行う予定です。
配信についての詳細は、日吉音楽学研究室のホームページ上で確認ください。

主催: 慶應義塾大学教育センター / フラジック・ヨコハマ推進委員会 / 慶應義塾大学日吉音楽学研究室
Designed by Kent Hirayama (Kent Musicology)

オンラインイベント

2020
12.24 木 13:00 配信開始

無料
December 24th Thursday, 2020
1pm start
Admission Free ONLINE EVENT

出演 笠井 毅
朗読 原 仁美
透見 裕子
音楽 曾我 傑

https://youtu.be/INGEhKxset0

日本国憲法は、種族にかんする一切の政治的な差別を撤去して、多次にわたる平等を保障する行為から、日本国憲法を形骸としてみなければならない。

日本国で書かれている日本国憲法を語るというのは「日本国」を語るということですが、それはコトバにカタカタと響いていつか自分自身を語るべきではないかと。

そして、そのことを通じて、憲法というものが人間存在の深みの中から生まれてきたということも、予感、直感できます。

笠井 毅

笠井毅舞踏公演「日本国憲法を踊る」

Kasai Akira Butoh Performance

【主催】慶應義塾大学教育センター・日吉音楽学研究室 (HAPP) / 慶應義塾大学アート・センター

2020年度 HAPP 企画

No	企画名	日程
1	ライブラリーコンサート 2020 in 日吉	10月21日(水) 10月23日(金)
2	響きつづける「声」のものがたり いしいしんじと聴く『義経千本桜』『源氏物語』	11月28日(土)
3	日吉音楽祭 2020 室内楽・ピアノマラソンコンサート	12月13日(日)
4	笠井毅舞踏公演「日本国憲法を踊る」	12月24日(木) 配信開始
5	吉増剛造 後輩たちに語る —『三田文学』のこと、石巻の詩人の家のことなど—	中止
6	みんなで走って！歌って！踊ろう！！	中止
7	義太夫節をひもとく —はじめての女流義太夫—	中止
8	平家納経の世界	中止

2 日吉キャンパス公開講座 — 2020年度「日吉キャンパス公開講座」 の中止にあたり—

前身となる「横浜市民大学講座」（第一回目を昭和55年に開催）から数えて47回目の日吉キャンパス公開講座を2020年の秋頃に開催の予定であったが、テーマ決めや講師の手配など、事前準備のために少なくとも4月の段階で、開催の可否について決める必要があった。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により、2020年4月7日より緊急事態宣言が関東主要4都県で発令され、オンラインでの対応、リモートワーク等が、当時まだ十分に整備されておらず、半年後の見通しを十分に立てることが困難な状況下にあった。公開講座委員間で、開催の可能性と

手段について模索し慎重に議論を重ねた結果、やむなく中止という結論を下した。

これまでに一度たりとも開催できなかった年度はなく、苦渋の決断となったが、ただ中止とするのではなく、これまでにご参加いただいた受講生の皆様に、中止の旨と、前年度に開催の公開講座のテーマ「出口戦略とその先の未来」に沿った内容で、教養とは何かを改めて問うような形での通知を郵送した。

その通知は以下の通りである。

（寺沢和洋）

2020年度慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座中止について（お知らせ）

平素より慶應義塾、並びに日吉キャンパス公開講座にご関心をお寄せくださりまして誠にありがとうございます。また、過去に開催の講座へのご出席を賜りましたこと、改めて御礼申し上げます。この度の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）並びに感染拡大により、影響をお受けになられた方々に心よりお見舞い申し上げます。

例年、この時期に日吉キャンパス公開講座開催のご案内をご郵送させていただいておりますが、運営委員会にて慎重に議論を重ねました結果、ご出席くださいます皆様の安全を確保した上での例年通りの開催は困難であるとの結論に至り、2020年度についてはやむなく中止の運びとなりました。

昨年度の公開講座は「出口戦略とその先の未来」という統一テーマの下に実施致しました。今回の世界的な事象が、コロナ後の、或いはコロナと共にする世界でどのように生きるべきか、つまりコロナ後・コロナ禍の出口戦略について、考えさせられる機会となったのも事実です。何が違って何が変わらないのか。そのために私達が個々にできることは何か。講座の説明文の中で「ある事象をどう終わらせるか、終わった後どうすべきか。出口を迎えるにあたって、それまでに培ったことを派生させ、どのように備え次を迎えるか」と記述させていただきましたが、まさにそのような瞬間を迎えている気もしております。

来年度以降の開催については、また改めて慶應義塾大学教養研究センターのウェブサイト、並びにご郵送等でお知らせをさせていただく予定であります。

末筆となりますが、皆様のご健康・ご安全を心より祈念申し上げますと共に、これまでのような平穏な日々が一日でも早く訪れることをお祈りし、再び日吉キャンパスで皆様にお会いできます日が来ることを心待ちにしております。

2020年7月7日

慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座運営委員長 寺沢和洋
慶應義塾大学教養研究センター所長 小菅隼人

3「創造力とコミュニティ」 研究会

2018年から始まった「創造力とコミュニティ」研究会を本年度は「パンデミックの中でのコミュニティとアート」の主テーマのもとに4回開催した。2020年度は大学構内への立ち入りが規制されたことに伴い、研究会の開催は、すべて石川町にあるレンタルスペース「カドベヤ」で行われることとなった。この場所は、教養研究センター主催の地域連携事業の拠点として、2010年度に開室したサードスペースであり、現在も毎週火曜日に居場所として機能しており、慶應義塾大学の学生もその活動に参加している。以下は、2020年度の研究会の具体的な内容である。

- ・ 第9回研究会 10月20日開催
「宗教とコロナウイルス」 講師：瀬野美佐氏
- ・ 第10回研究会 11月17日開催
「コロナウイルスと文化支援」
講師：厚地美香子氏、若狭英雄氏
- ・ 第11回研究会 12月1日開催
「パンデミックの中で自分自身に向き合う」
講師：手塚千鶴子氏
- ・ 第12回研究会 3月16日開催
「パンデミック時代の新たな『公共』アート」
講師：横山千晶

第9回と第11回は「コミュニティ」をテーマとしており、第10回と第12回は「創造力」の部分テーマとしている。

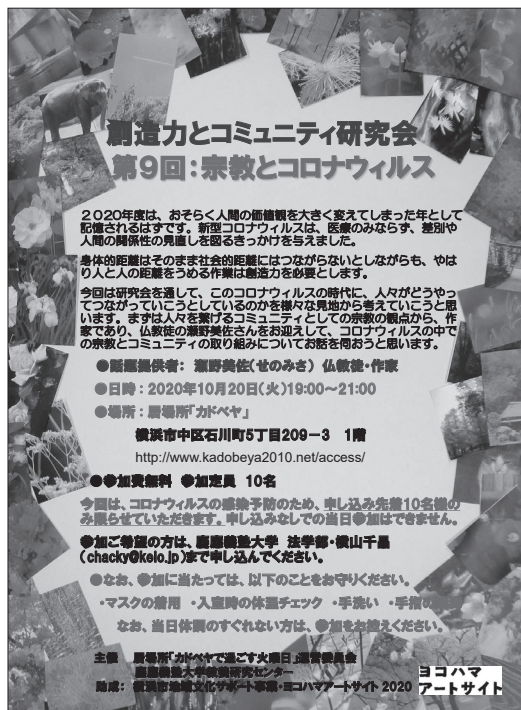
第9回は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、社会的距離が測られ個人が分断されていく中で、宗教コミュニティは、実際にどのような形で様々な人々をつなぎ合わせ精神的な支えを提供しているのかを、仏教団体に務めつつ作家活動を行っている瀬野美佐氏にうかがった。同時に第11回の手塚千鶴子氏の講演では、コミュニティから分断された中で個人がどうやって自らの内面を見つめつつ、新たな自己とのつながりを構築していくのかをカウンセラーの立場から語っていただいた。

このお二人の話から明らかになったことは、新型コロナウイルスの存在は、人間と同じく自然の中での存在なのであり、今後人間がウイルスとどのように共存していくことが可能なのかを視座に入れながら、自分との向き合い方、他者との交流の在り方を考え直すべきだ、というパラダイムシフトでもあ

る。

続く「創造力」をテーマとした第10回では、パンデミックの中での世界各国の文化政策について、認定NPO法人「あっちこっち」代表の厚地美香子氏から語ってもらい、日本の現状についても触れていただいたうえで、チェンバロ奏者の若狭英雄氏から、芸術活動が規制される中でのアーティストたち個人の努力についても紹介していただいた。同時に各国政府が推奨する配信によるアーティスト支援についても語っていただいた。第12回の研究会では、パンデミックの中でコミュニティに訴えるアートの力とコミュニティをつなぐ公共の芸術の役割について、研究代表者の横山がファシリテーターとして話題を提供し、参加者の間の議論を促した。

新型コロナウイルスの感染症拡大による大学の閉鎖に伴い、研究会は秋以降の開催となった。残念ながら、大学構内立ち入り制限のために外部者の参加が難しく、大学構内で行う予定だったシンポジウムは結局開催することができなくなったのみならず、秋学期に研究会とのタイアップで行う予定だったコミュニティダンスの実験授業も、感染症の拡大防止のためにキャンセルせざるを得なくなった。2021年1月の緊急事態宣言の発令により、1月の研究会は3月に延期するなど、臨機応変の対応を迫られると同時に研究会も回数を減らして行わざるを得なく



なった。しかし、そのような状況だからこそ、参加者の議論はより活発となったと言える。研究会の開催においては、換気、清掃、参加者の人数制限と、体温検査や手指の消毒、マスクの着用など感染防止の呼びかけなどを徹底して行った。

2021年3月に、2018年から2020年度までの3年間の研究会の成果をまとめた本、『コミュニティと芸術—パンデミック時代に考える創造力』(横山千晶

著、教養研究センター選書)が出版された。来年度からはこの知見を大学の授業で生かしていくのみならず、研究会を引き続き開催することで、ポスト・コロナウイルスの時代の創造力とコミュニティを思考する拠点としていきたい。また来年度は感染症の軽減により、状況が許す限り学生の参加を促していきたい。

(横山千晶)

1 慶應義塾大学教養研究センター規程

平成14年7月2日制定

改正 平成17年 6月 3日 平成18年 5月 9日
 平成20年 5月 1日 平成20年11月 4日
 平成21年12月15日 平成23年 3月29日
 平成26年12月 5日 2020年 6月 2日

(設置)

第1条 慶應義塾大学（以下、「大学」という。）に、慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts。以下、「センター」という。）を置く。

(目的)

第2条 センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進およびこれに関する教育活動を行うことで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 前号の事業に関する授業科目の設置と教育活動
- 3 教養研究および教育活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 4 教養研究および教育活動への助成および支援
- 5 教養研究および教育活動状況の把握と情報の収集および発信
- 6 その他センターの目的達成のために必要な事業

(組織)

第4条 ① センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
- 2 副所長 若干名
- 3 所員 若干名
- 4 研究員 若干名
- 5 事務長
- 6 職員 若干名

② 所長は、センターを代表し、その業務を統括する。

③ 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。

④ 所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。

⑤ 研究員は、特任教員、研究員（有期）または兼

任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

⑥ 国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。

⑦ 事務長は、センターの事務を統括する。

⑧ 職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。

(運営委員会)

第5条 ① センターに運営委員会を置く。

② 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉 ITC 所長
- 9 体育研究所長
- 10 外国語教育研究センター所長
- 11 自然科学研究教育センター所長
- 12 日吉キャンパス事務長
- 13 その他所長が必要と認めた者

③ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

④ 運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

⑤ 運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
- 2 センターの事業計画に関する事項
- 3 研究プログラムに関する事項
- 4 人事に関する事項
- 5 予算・決算に関する事項
- 6 コーディネート・オフィスに関する事項
- 7 その他必要と認める事項

(コーディネート・オフィス)

第6条 ① センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するために、運営委員会の下にコーディネ

ネット・オフィスを置く。

② コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。コーディネーターは、所長、副所長、事務長とともに、センターの事業を推進する。

③ コーディネート・オフィスは、必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託することができる。

(特別委員会)

第7条 運営委員会は、必要に応じて特別委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

(教職員の任免)

第8条 ① センターの教職員等の任免は、次の各号による。

1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。

2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。

3 特任教員および研究員(有期)については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

4 訪問研究者については、「訪問学者に対する職位規程(昭和51年8月27日制定)」の定めるところによる。

5 事務長および職員については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

6 コーディネーターは、所員および義塾職員の中から、所長が推薦し、運営委員会が委嘱する。

② 所長、副所長およびコーディネーターの任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

③ 所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

④ 兼任研究員の任期は、次条に定める研究プログラムの研究期間とする。

(研究プログラム)

第9条 ① センターに次の研究プログラムを置く。

1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究

2 一般研究：センターが必要と認めた個人研究

または共同研究

3 特定研究：センターが企画、立案した研究

② 研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

(契約)

第10条 ① 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

② 学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

(経理)

第11条 ① センターの経理は、「慶應義塾経理規程(昭和46年2月15日制定)」の定めるところによる。

② センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

③ 外部資金の取扱い等については、学術研究支援部の定めるところによる。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附 則

① この規程は、平成14年7月1日から施行する。

② この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

附 則(平成17年6月3日)

この規程は、平成17年6月3日から施行する。

附 則(平成18年5月9日)

この規程は、平成18年5月9日から施行し、平成18年5月1日から適用する。

附 則(平成20年5月1日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成20年11月4日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成21年12月15日)

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則(平成23年3月29日)

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則(平成26年12月5日)

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

附 則(2020年6月2日)

この規程は、2020年7月1日から施行する。

2 運営委員会委員

2020年4月1日～2021年3月31日在籍者
第10期（2019年10月1日～2021年9月30日）

教養研究センター担当常任理事

青山藤詞郎

教養研究センター所長

小菅 隼人

教養研究センター副所長

片山 杜秀

高橋 宣也

荒金 直人

瀧本佳容子（2020年9月30日まで）

寺沢 和洋（2020年10月1日から）

教養研究センター事務長

大古殿憲治

文学部長 松浦 良充

経済学部長 池田 幸弘

法学部長 岩谷 十郎

商学部長 岡本 大輔

医学部長 天谷 雅行

理工学部長 岡田 英史

総合政策学部長

土屋 大洋

環境情報学部長

脇田 玲

看護医療学部長

武田 祐子

薬学部長 三澤日出巳

文学部日吉主任

坂本 光

経済学部日吉主任

柏崎千佳子

法学部日吉主任

奥田 暁代

商学部日吉主任

大矢 玲子

医学部日吉主任

井上 浩義

理工学部日吉主任

井上 京子

薬学部日吉主任

金澤 秀子（2020年9月30日まで）

大谷 壽一（2020年10月1日から）

体育研究所所長

石手 靖

日吉メディアセンター所長

横山 千晶

日吉ITC所長

小林 宏充

外国語教育研究センター所長

七字 眞明

自然科学研究教育センター所長

井奥 洪二

日吉研究室運営委員会委員長

大出 敦

日吉キャンパス事務長

國分 紀嗣

日吉学生部事務長

千葉 徹

日吉メディアセンター事務長

長島 敏樹

日吉キャンパス事務センター課長

川田 孝征

日吉行事企画委員会（HAPP）委員長

石井 明

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

寺沢 和洋

3 組織構成員

2020年4月1日～2021年3月31日

所員：184名（2021年3月31日現在）

所長：小菅隼人（理）

副所長：片山杜秀（法）

高橋宣也（文）

荒金直人（理）

瀧本佳容子（商・2020年9月30日まで）

寺沢和洋（医・2020年10月1日から）

コーディネーター：

坂本光（文）、新島進（経）、武藤浩史（法）、
種村和史（商）、西尾宇広（商）、鈴木亮子（経）、
高山緑（理）、鈴木晃仁（経）、不破有理（経）、
徳永聡子（文）、大野真澄（法・2020年7月31日まで）、
高田眞吾（理）、神武直彦（SDM研究科）、石井明（経）、
寺沢和洋（医・2020年9月30日まで）、
國分紀嗣（キャンパス事務長）、大古殿憲治（教養セ事務長）

広報担当：高橋宣也（文）

日吉行事企画委員会（HAPP）

委員長：石井明（経）

委員：高橋宣也（文）、津田眞弓（経）、大出敦（法）、
竹内美佳子（商）、小菅隼人（理）、小林拓也（理）
石手靖（体研）、澁谷麻由美（保セ）、
國分紀嗣（キャンパス事務長）、川田孝征（運営サ）、
周藤有実（運営サ）、友田明文（学生部）、
五十嵐曉俊（学生部）、長島敏樹（日吉メディアセ）、
今井星香（日吉メディアセ）、鈴木都美子（教養セ）

極東証券寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人（理）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、荒金直人（理）、
瀧本佳容子（商・2020年9月30日まで）
寺沢和洋（医・2020年10月1日から）

「生命の教養学」企画委員会（2020年9月30日まで）

委員長：西尾宇広（商）

委員：坂内健一（理）、高山緑（理）、荒金直人（理）、
清水史郎（理）、有川智己（経）、川添美央子（商）、
宮本万里（商）

白寿生科学研究所寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人（理）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、
荒金直人（理）、石井明（経）
瀧本佳容子（商・2020年9月30日まで）
寺沢和洋（医・2020年10月1日から）

コーエーテックモホールディングス寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人（理）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、
荒金直人（理）、不破有理（経）
瀧本佳容子（商・2020年9月30日まで）
寺沢和洋（医・2020年10月1日から）

日吉学企画委員会

委員長：不破有理（経）

委員：小菅隼人（理）、片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、
安藤広道（文）、福山欣司（経）、長田進（経）、
大出敦（法）、有川智己（経）、
神武直彦（SDM研究科）、都倉武之（福澤研究セ）、
阿久澤武史（塾高）、太田弘（元普通部）、
杵島正洋（塾高・2020年10月1日から）

日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：寺沢和洋（医）

委員：小菅隼人（理）、石井明（経）、山下一夫（理）、
高橋宣也（文）、有川智己（経）、酒井規史（商）、
神武直彦（SDM研究科）、野口和行（体研）、
國分紀嗣（キャンパス事務長）

庄内セミナー実行委員会

委員長：鈴木亮子

委員：小菅隼人（理）、荒金直人（理）、
鳥海奈都子（塾高）、
瀧本佳容子（商・2020年9月30日まで）

教養研究センター事務局

大古殿憲治（事務長）
鈴木都美子、池本晶子、富田いづみ、
大澤綾

4 2020年度の主な活動記録

Date		Events
4	3日	教養研究センター設置科目全体ガイダンス中止／ センターホームページに「設置科目の履修に関する変更について (新型コロナウイルス対応) ページ」を掲載
	15日	第1回所長・副所長会議
	21日	「アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ」新作6本公開
5	15日	ニュースレター 36号刊行
	18日	第2回所長・副所長会議
6	22日	第3回所長・副所長会議
7	20日	第4回所長・副所長会議
8	3日	第1回コーディネート・オフィス会議
	11日～16日	身体知授業
	22日	学会・ワークショップ等開催支援 オンライン連続講演&討論会 「日露の美術工芸交流とマトリョーシカ 第1回 マトリョーシカ日本起源説をめぐって」
9	7日	第1回運営委員会
	22日	学会・ワークショップ等開催支援 オンライン連続講演&討論会 「日露の美術工芸交流とマトリョーシカ 第2回 ロシアの工芸とジャポニズム ミハイル・ヴルーベリを中心に」
	23日	第5回所長・副所長会議
10	9日	基盤研究 文理接続プロジェクト研究会 第1回「医学史と生命科学論」 感染症の基礎知識
	20日	情報の教養学「オンライン社会を生き抜く著作権」動画配信開始
	20日	創造力とコミュニティ研究会9「宗教とコロナウイルス」
	21日・23日	HAPP企画「ライブラリーコンサート2020 in 日吉」
	30日	第6回所長・副所長会議
11	2日	<選書刊行記念企画>著者と読む教養研究センター選書 第1回 理性という狂気 —— G・バタイユから現代世界の倫理へ
	6日	基盤研究 文理接続プロジェクト研究会 第2回「医学史と生命科学論」 Covid-19のパンデミーと食肉の問題
	13日	第2回コーディネート・オフィス会議
	14日	学会・ワークショップ等開催支援 「プレストと世界文学——自分だけのズーム、テイク1」
	16日	第2回運営委員会
	17日	創造力とコミュニティ研究会10「コロナウイルスと文化支援」
	18日	第二十八弾「研究の現場から」 縣由衣子
	21日	学会・ワークショップ等開催支援 オンライン連続講演&討論会 「日露の美術工芸交流とマトリョーシカ 第3回 山本鼎の農民美術とロシア」
	27日	第7回所長・副所長会議
	28日	HAPP企画「響きつづける『声』のものがたり いしいしんじと聴く『義経千本桜』 『源氏物語』」
30日	ニュースレター 37号刊行	
12	1日	創造力とコミュニティ研究会11「パンデミックの中で自分自身に向き合う」
	9日	第二十九弾「研究の現場から」 石川大智
	11日	基盤研究 文理接続プロジェクト研究会 第3回「医学史と生命科学論」 感染のリスクと科学技術
	13日	HAPP企画「日吉音楽祭2020 室内楽・ピアノマラソンコンサート」
	15日	「アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ」新作3本公開
	19日	古楽アカデミー・オーケストラ演奏会 《フランス王宮のためのサンフォニー》
	22日	少人数合唱クラス9名による小演奏会
	23日	コレギウム・ムジクム・オーケストラ演奏会
	23日	第三十弾「研究の現場から」 石田真子
	24日	HAPP企画「笠井叡舞踏公演『日本国憲法を踊る』」動画配信開始
26日	学会・ワークショップ等開催支援 オンライン連続講演&討論会 「日露の美術工芸交流とマトリョーシカ 第4回 マトリョーシカの謎と七福神」	
1	8日	基盤研究 文理接続プロジェクト研究会 第4回「医学史と生命科学論」 危機への備え：現代人類学と感染症
	12日	第8回所長・副所長会議
	15日	「アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ」新作5本公開
	28日	「アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ」新作1本公開

Date		Events
2	1日	「庄内セミナー」特別講話（動画）公開 極東証券寄附講座 アカデミック・スキルズ プレゼンテーションコンペティション 基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第5回「医学史と生命科学論」 ワクチンなど最近の話題にみる文と理の接点 第3回コーディネート・オフィス会議
	5日	
	5日	
	26日	
3	4日	第3回運営委員会 創造力とコミュニティ研究会 12 「パンデミック時代の新たな『公共』アート」 基盤研究 文理連接プロジェクト研究会 第6回「医学史と生命科学論」 総合討論：文理連接プロジェクトの意義と方向性について 第9回所長・副所長会議 第10回所長・副所長会議
	16日	
	19日	
	19日	
	31日	

慶應義塾大学教養研究センター
2020年度 活動報告書

2021年8月31日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 小菅隼人

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-566-1151

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

印刷・製本 サンパートナーズ(株)

©2021 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。

ISBN978-4-903248-60-8

Keio University



慶應義塾大学教養研究センター

Keio Research Center for the Liberal Arts